

松 山 大 学 論 集  
第 25 卷 第 5 号 抜 刷  
2 0 1 3 年 12 月 発 行

# わが国におけるベルクソン受容史についての試論

—— 文献目録を手掛かりとして ——

郡 司 良 夫

# わが国におけるベルクソン受容史についての試論

## —— 文献目録を手掛かりとして ——

郡 司 良 夫

はじめに

第1章 文献目録を受容史研究の資料とすることについて

第2章 既存の編年体の文献目録について

2.1 文献目録＝書誌について

2.2 既存の編年体の文献目録について

2.3 受容史研究のための編年体文献目録の試み —『ベルクソン書誌－日本における研究の展開』の場合—

2.4 結 論

第3章 わが国におけるベルクソン受容の歴史

3.1 ベルクソンについて

3.2 第一期：明治の終わりから関東大震災まで

3.2.1 西田幾多郎とベルクソンのかかわり

3.2.2 夏目漱石とベルクソンのかかわり

3.2.3 大正期のベルクソンの流行

3.3 第二期：関東大震災の復興から敗戦まで

3.4 第三期：戦後から昭和35年まで

3.5 第四期：昭和36年以降

3.5.1 1960年代後半から1970年代にかけて

3.5.2 1980年代

3.5.3 1990年代

3.5.4 2000年代

第4章 終 章

結 び

附録1 わが国におけるベルクソンの著作の翻訳および研究書等の刊行年表  
1913～2013

附録2 ベルクソンの著作の翻訳および研究書等の刊行一覧 1913～2013

## は じ め に

わが国にベルクソンの名が伝えられてから100年経過した。この100年間にわが国で生産されたベルクソン関係の図書、論文・記事は1,000件を超える。明治末から大正初めの数年間、ブームといえるほど論壇を賑わせた時期はあったが、ブームはたちまち去った。この間の状況は宮山昌治の論文「純粹持続の効用——大正期ベルクソニズムと戦争——」に詳しい<sup>1)</sup> このブームは、論壇で健筆を振っていた中澤臨川などによるものだが、当時ベルクソンと並び喧伝されたオイケンは今日雑誌論文として登場することもなく、忘却の淵に沈んでしまった。しかし、ベルクソンは一時的なブームが去ってからも読み継がれ、腰を据えた研究も細々と続けられた。昭和の初め頃は、哲学といえばドイツ哲学と言われ、大学での講義でもドイツ哲学が中心でフランス現代哲学(当時の)の講義はなかった、と澤瀉久敬は語っている<sup>2)</sup> その名残は今日のわれわれ一般読者にも微かに残っている。このような状況の中でも、ベルクソンの著作の翻訳が出され、創刊間もない岩波文庫に収められたことで読み継がれることになった。戦時中もベルクソンの研究書が何点か刊行され、研究も続けられていたが大正初年のようなブームはこなかった。再びベルクソンのブームが起きたのは翻訳の『ベルグソン全集』が白水社から刊行され、完結した1966年に雑誌『理想』が特集を組んだのちに、僅かながら論文が増加したが、本格的にブームといえるものが到来したのは1990年代に入ってからである。雑誌『現代思想』が特集を組んだのがきっかけであったといえる。もっとも、このブームは大正初めのブームとは異なりマスコミを巻き込むことはなく、若手の研究者に発表の機会が訪れたように見える。

このような動向は、筆者が数年前に『ベルクソン書誌——日本における研究の展開』を編纂刊行する過程で気付いたことである。今、わが国におけるベルクソン受容史をまとめようとして、ベルクソンの「哲学入門」の冒頭に置かれた言葉を思い出す。彼は「物を知る」のに非常に違った二つの見方があると

して、「第一の知り方はその物のまわりを回ることであり、第二の知り方はその物のなかに入ることである。第一の知り方は人の立つ視点と表現〔表象〕の際に使う記号〔象徴〕に依存する。第二の知り方は視点には関わりなく記号にもよらない。」と<sup>3)</sup>

一般に外国思想や文学、芸術がある国なり地域なりでどのように受容されてきたか、つまり受容史を研究する方法として、ベルクソンの言葉になぞらえれば、これまでは第二の方法が取られてきたといえよう。しかし、ここでは第一の方法、つまり、書誌＝文献目録を編纂する過程で得られた知見からベルクソン受容史をまとめる。この論文に「試論」の語を用いた所以である。

これまで、書誌あるいは文献目録の機能は関係する文献の存在、所在を確認する道具と捉えられてきた。しかし、その編纂の仕方によっては単なる文献検索の道具であるだけでなく、文献目録自体が研究対象の資料となることを明らかにしたい。

〔追記〕

本論稿は2012年の秋に一応書き上げたのであるが、公表することなくそのまま筐底に秘していたものである。それから今日まで類似の論文は現れていないように見受けられるので、瑕疵の多い論文ではあるが、何ほどかの意義があるかもしれないと思い、加筆して公表することにした。最後に付した二つの「附録」がこれからベルクソン哲学に歩み入ろうとする人に少しでも役立てば幸である。

また、本論で『ベルクソン書誌－日本における研究の展開 補遺編』に触れているので、一言説明しておく。本編にあたる『ベルクソン書誌－日本における研究の展開』は2004年までに刊行された図書と発表された論文を収録しているので、この補遺編では、基本的に2005年以降2011年までに刊行された図書および発表された論文を収録することにした。しかし、本編刊行当時未見であったものおよび新たに発見したものが約50件確認できたので、それを加えて編集した。ただ、この補遺編はいずれ本編の改訂増補を行うための準備とい

うことで、極少部数作成したものであり、市販はされていない。

なお、附録の方には2013年までに刊行された図書を追加したが、まだ見落としがあるかもしれない。

## 注

- 1) 宮山昌治：純粹持続の効用 —— 大正期ベルクソニズムと戦争 —— 『成城文藝』No. 169, 2000. 2. pp. 1-20.
- 2) 澤瀉久敬：わたしの恋いびとフランス哲学 —— 日仏哲学会発会式記念講演 —— 『理想』No. 499, 昭和49年12月号 pp. 79-93.
- 3) 河野与一訳『思想と動くもの』 岩波書店 1998. 9. (岩波文庫 33-654-4) p. 249.  
(木田元の編集による一冊本)  
ベルクソンのこの著作についてはいくつかの訳があるが、ここでは筆者が若年の頃から親しんできた河野訳から引用した。

## 第1章 文献目録を受容史研究の資料とすることについて

外国の文物を如何に受容してきたかを明らかにするのが受容史研究の目的である。受容史の研究においても他の研究と同様に文献目録を利用する。しかし、文献目録そのものを受容史研究の資料として論じた文献には出会っていない。少なくとも、ここで取り上げたベルクソンに関して集め得た国内文献には含まれていない。宮山昌治によるわが国におけるベルクソンの受容史研究が次々と発表されているが、文献目録そのものを研究対象としているわけではない<sup>1)</sup>。

2009年12月号の雑誌『思想』は「ベルクソン生誕150年」特集に全ページをあてている。その中の藤田尚志による「ベルクソン研究の現在」では、日本のベルクソン研究と海外のベルクソン研究に分けて概観されている。しかし2012年末の段階でも、宮山の論文以外にわが国におけるベルクソン受容史全体を流れとして述べたものが出てこないということは、ベルクソン受容史の研究がわが国では始まったばかりであることを示している。

さて、文献目録を受容史研究の資料とすることについて述べたい。文献目録については第2章で述べることにする。

これまで文献目録がなぜ研究資料とされてこなかったかについて述べてみる。次いで、文献目録を研究資料とするには従来の文献目録を如何に改善すればいいか、検討することにする。

一般に、文献目録に対する認識は、

- ① 文献資料探索の道具であるという位置付けであったこと。
- ② そのため検索機能に重点を置いた編成がなされていること。
- ③ 以上のことから、求める文献を確認できればその役目は終わりであった。

このような文献目録の機能は重要であり、今後とも重要であり続ける。年々大量に発生する文献の中から特定の必要文献を見付け出し、それを読み、考え、書くという一連の作業が研究者の、特に人文科学の世界では中心であるから、文献目録それ自体を眺めて考えるよりも、その構成要素に研究者の注意は向かっている。この観点からすれば、文献目録を研究対象とすること自体意味をなさないということになるうか。

一方、文献目録も研究資料の一つとして重視したいというのが筆者の立場である。即ち、文献目録が単なる検索道具と考えるのではなくて、編成の仕方によっては別の姿を現すのではないか、ということである。つまり、

- ① 文献目録は「人類の知の見取図」であると考えられないか。
- ② また、「知的生産の「場」を示す見取図」といってもいい。

本来、受容史は時系列に沿って展開されるパノラマといってもいいが、この立場から従来の文献目録を見ると、それは個々の事象を切り取って来て一定のルールで類別、排列している、いわばパッチワークではないだろうか。これでは一連の流れとしての受容史をそこに読み取ろうとすれば、なかなか骨の折れる作業となる。つまり、筆者が提案したいのは文献目録の本体を、このパッチワークの世界から本来の姿に戻すことである。ただし、そのようにすると現在

威力を発揮している検索機能が極端に悪くなるであろう。そのためには索引に工夫を施さなければならない。要するに、受容史研究のための文献目録は編年体の目録本体と、目的に応じた索引の工夫が必要となるということである。このような意図のもとに文献目録を編成すれば、文献目録自体の持つ従来とは異なった側面が現れてくるものと期待できる。即ち、検索の道具から解放された読む文献目録、あるいは眺める文献目録が出現し、それを見る人は各自の好みに従ってこのパノラマを眺め、何かを読み取ることが出来るだろう。具体的な試みについては、次章で紹介する。

なお、筆者は文献目録について、従来から検索道具の一つという捉え方に一種の不満を持っていたが、ここで示した「知の見取図」という捉え方をするようになった経緯を少し述べておきたい。

文献目録を「知的生産の〈場〉」と捉えて、壮大な夢を語った棚橋光男の『後白河法皇』に出会ったことで、文献目録は「知の見取図」となるのではないかと考えるに至った。棚橋は次のように書いている。少し長いが、関連部分を引用する<sup>2)</sup>

残念なことに『台記』〔藤原頼長の日記、筆者注〕は、今日、断片的にしか伝存しない。その断片的な記録によって知ることの出来る漢籍（書目）を信西の『通憲入道蔵書目録』（後述）に収載する書目約2400巻・400帖余と総合すれば、12世紀後半段階の日本知識社会における東アジア典籍の受容の実態と、この段階における知的生産の《場》の性格を解明する基準的資料群となる。〔漢数字を算用数字に直した。筆者注〕

として、次の図を掲げている。いま、その図を分解して示すと、

$$A + B - C \div D \rightarrow E$$

A：『台記』所載漢籍

B：『通憲入道蔵書目録』所載漢籍

C：『日本国見在書目録』所載漢籍

D：遣唐使派遣停止以降いわゆる「平氏政権の日宋貿易開始」以前（9世

紀末～12世紀末), 東アジアの知的交流世界の中で日本に流入した漢籍の総数とその内訳

E: 古代～中世中期成立期, 日本における知的生産の《場》は, 東アジアの知的交流世界とどのように連動していたのか? その構造的関連の解明

そして, この「≡」を「=」に近づける方法を示している。即ち,

現存公卿日記(たとえば『中右記』など)や編纂物(たとえば『本朝文粹』など)から漢籍の書目名および逸文を洗い出していく気の遠くなるような作業が必要だ。そして, こうした作業全体が, Eに示したような壮大な文化史的課題につながっていくことを, 私は確信している。

棚橋光男は若くして逝った日本中世史の研究者である。彼は中世という時代を輪切りにして, その知的生産の場を示す文献目録を夢見ていた。この発想は図書館情報学の世界に住む者の発想ではないが, 日頃文献目録(=書誌)を相手にする図書館員にとっては「眼から鱗」といってもいいのではないか。即ち, 文献目録を単なる検索道具で終わらせる必要は無いのである。

この文献目録を「知的生産の場」あるいは「知の見取図」と捉える考え方はさまざまに応用できるものと思われる。本論稿は, ペルクソン受容という一幅の絵巻を提示できる文献目録を想定したことになる。

本章のまとめとして, 次のことを確認しておく。

- 1 受容史研究に役立つ文献目録は, 編年体で構成されていること。これは全体を一連の流れとして捉えるためである。
- 2 どのような索引を用意するかは, 文献目録編纂の意図によって種々変化すること。

#### 注

- 1) 宮山昌治のペルクソン受容に関する論文には次のものがある。

- 1 有島武郎とベルクソン受容 『成城国文学』 No. 15, 1999. pp. 16-28.
  - 2 純粹持続の効用——大正期ベルクソニズムと戦争—— 『成城文芸』 No. 169, 2000. pp. 1-21.
  - 3 大正期ベルクソン哲学の受容 『人文』（学習院大学人文科学研究所）No. 4, 2006. pp. 83-104.
  - 4 昭和期におけるベルクソン哲学の受容 『人文』（学習院大学人文科学研究所）No. 5, 2007. pp. 57-75.
  - 5 中国におけるベルクソン哲学の初期受容 —「民鐸雜言」柏格森號を中心に— 『成城国文学』 No. 23, 2007. pp. 38-55.
- 2) 後白河法皇／棚橋光男著 東京：講談社，2006. 8.（講談社学術文庫） pp. 58-59.

## 第2章 既存の編年体の文献目録について

「はじめに」では、文献目録という語と書誌という語を使ってきた。

今日、図書館情報学の世界では文献目録を一般に書誌と呼んでいる。しかし、堀込静香が『書誌と索引』の中で「書誌」と「目録」は本来異なる目的を持っていたが、今日では「目録と書誌はほとんど同義語として用い」られていることを指摘している<sup>1)</sup>。筆者は、今、堀込のこの指摘に従い、2音の「書誌」よりも4音の「文献目録」を使いたい。聞き手にとって判別しやすいということもある。ただし、文章の流れから両語が混在することもあることを断っておく。つまり、同義語として使用する。ただし、全国書誌のように、慣用として「全国文献目録」とは言わないものもあるので、そのようなものについては「書誌」を使用する。

### 2.1 文献目録＝書誌について

今日、一般に書誌（＝文献目録）と呼ばれているものは列挙書誌学の研究成果として編纂される列挙書誌を指している。では、列挙書誌学をはじめとする書誌学はどんなものであろうか。ロバート・B・ハーモンの簡潔な説明があるので、それを引用する<sup>2)</sup>。

ビブリオグラフィー（書誌学）は次のような二つの領域（部門）に分けられる。

I. 物的実体もしくは物的対象としての文字資料の研究

目的：正確かつ精密に識別し，記述すること。

分析書誌学ないしは批判書誌学

原文書誌学：版や刷りによって原本とその伝播について比較，研究すること

史的書誌学：個々の図書その他の文字資料が作られた場所と年代を確定すること

記述書誌学：「理想本（ideal copy）」とそのすべての異本を識別すること

II. 知的実体としての文字資料の研究

目的：個々の図書その他の文字資料に関する情報を収集し，論理的で有用な排列をすること

列举書誌学ないしは体系書誌学

図書その他の文字資料のリストの編纂

著者書誌

ある著者の著作およびある著者に関する著作のリスト

書誌の書誌

特定主題に関する書誌のリスト

目録

特定機関の蔵書リスト

文献案内

特定主題に関する文献リストおよび「案内的」情報

全国書誌

特定の国で刊行された著作のリスト

[以下，略]

（下線は，原著者）

ここで「著者書誌」とあるのは，われわれが一般に「人物書誌」あるいは「個

人書誌」と呼んでいるものである。先にも述べたように、現在「書誌」といえば上記の列挙書誌学の成果物である「列挙書誌」を指している。

以下で述べるのはこの列挙書誌の中の人物書誌（即ち、人物文献目録）について、従来の書誌をいくらかでも改善するための提案である。後述するように、列挙書誌は便宜的に一次的書誌と二次的書誌に分けられ、人物書誌は二次的書誌に位置づけられるのが普通である。つまり、一次的書誌である全国書誌から関連する文献を選択して作ることができるという理解である。二次的書誌のすべてが、果たしてそうであるか。確かに、関連文献を抽出して作られる書誌はたくさんあり、それはそれで十分利用価値がある。しかし、中にはそれでは不十分な場合がある。

そこで、書誌はこれまで言われてきたように、情報の生産者と情報の消費者を仲介する手段あるいは道具である、という見方を少し変えてみたい。即ち、ここでは「書誌は文字で表された記録である「知」の見取図」であると考えたい。人物書誌の場合、この案内図は「ある人物の知的世界の見取図」を示すものであり、公表されたものだけを取り出しても、そこには単行本があり、単行本の一部として収録された論文があり、雑誌論文・記事から新聞に掲載された記事までが含まなければならない。

一般に、一次的書誌の収録対象は図書（単行本、叢書）、雑誌といういわゆる書誌単位であり、文献単位、つまり単行本に収録された一論文、雑誌に掲載された個々の論文・記事を対象とはしていない。

以上のことから、「知の見取図」としての書誌をどのように構成するか、その一端をいくつかの例で検討し、従来行われてきた書誌を念頭に置きながら、それらとは異なる書誌の姿を提示する。

### 2.1.1 文献目録は「知」の見取図であるということ

文献目録の定義なり説明なりにはいろいろあるが、ここでは「文献目録は文字であらわされた「知」の見取図」であると考えたい。

国の見取図に全国地図があり、都市には都市地図があり、街には街の案内図があると同時に、文字によって記録された人間の知識にも見取図が必要である。見知らぬ土地へ出かけて行く時には、時間の余裕があればその土地の地図に一応目を通す(印刷された地図であれインターネットで検索した地図であれ)というのは誰しも経験するところであろう。同様に、未知のあるテーマなりある出来事なりを調べようとする時の道案内をするのが文献目録である。時には、確認のために繙くこともある。

国の地図に相当するのが全国書誌、都市地図や地形図や地層図に相当するものが主題書誌とすれば、街の案内図に相当するものは何であろうか。人物書誌がさしずめこの案内図に相当すると考えてもそれほど場違いのものとは言えないだろう。そして、全国地図や都市地図はあまりバラエティに富んでいるとはいえないが、街の案内図になるとさまざまな工夫の凝らされたものがあるように、書誌の中でも二次的書誌といわれる主題書誌、人物書誌になるとさまざまな工夫が施される。

ここでは書誌全般について論じたいわけではなく、対象を絞って人物書誌について検討する。それでも範囲が広すぎるので、文学と哲学に関連したものに限定したい。具体的には文学ではバルザックの書誌、哲学ではニーチェとバルクソンの書誌を取り上げる。

### 2.1.2 文献目録は入門者の道案内であること

既に述べたように、ある主題、あるテーマに関する文献目録の役割の第一は、その主題やテーマに不案内な者の道案内にある。つまり入門者のためのものである。第二には、その主題あるいはテーマについてある程度熟知している者に遺漏を知らせることである。その主題やテーマの研究の最先端に立つ研究者にあっては、多くの場合主要な文献は収集済みであり、その上いわゆるインフォーマルなコミュニケーションで多くの情報を入手しているので、入門者ほど文献目録の世話にはならないであろう。この二つの役割を果たすための文献目録

作成上の要件は、可能な限り網羅的に関連文献を収集し、位置づけることである。

### 2.1.3 書誌（＝文献目録）にはさまざまな姿がある

ここでは、これまでの書誌の歴史を概観する。この項では、文献目録の代わりに書誌を用いる。今、念頭にある文献目録よりも広い意味で書誌の語が使われているからである。

街の案内図にもさまざまなものがあるように、書誌にもさまざまな姿がある。書誌の収録対象は当初は図書であった。もちろん今日の図書とは形態が違っていた。しかし、収録対象が図書単位、つまり書誌単位であったことは東洋でも西洋でも同じである。

中国で最初の目録が作られたのは前漢末期であるといわれているが、それは今日失われて伝わらない。現在われわれが眼にすることの出来る最も古い目録は『漢書芸文志』である。古代オリエントおよび古代世界では、シャムーリンの浩瀚な『図書館分類＝書誌分類の歴史』によれば、アッシリアのニネヴェの図書館では既に紀元前7世紀頃蔵書目録が存在し、そこでは図書と文書が分類されていたという<sup>3)</sup>。しかし、われわれが手にし得る図書館史の年表では、アレキサンドリアの学者＝詩人であったカリマコスが編纂したといわれるアレキサンドリア図書館の蔵書目録『ピナケス』が古いものとして出てくる。紀元前3世紀の中頃のことである。それ以前のものについては不明な点が多く、今後の考古学研究の成果を待つことになる。このピナケスについても断片的で、その全体像は不明である。日本では『日本國見在書目録』が最初に編纂された目録である。これは9世紀の終わりに京都冷然院が焼失した折、焼失を免れた書物（＝漢籍）のリストで藤原佐世が編纂したものである<sup>4)</sup>。

これらの目録に共通しているのは、いずれも分類目録であること、収録の対象となったのはその当時存在した図書であるという点である。図書を「分類」して目録を構成することは共通していたが、分類そのものは異なっていた。も

のを識別するためには「まず名前を付け、分類しなければならない」ということがいわれるが、分類の仕方（＝分類体系）が違うということはものの捉え方が違うということを意味する<sup>5)</sup>

書誌の面から見ると、古代オリエントからローマ、中世キリスト教世界を経て今日のヨーロッパ世界へと続く書誌作成の歴史は、中国の目録学で言う「簿録」の作成史であったといえよう。日本で作成されてきた書誌も同様である。そして、今日作成されている書誌や文献目録といわれるものも、この系列に入る。中国での書誌作成は単なる簿録の作成ではなく、学統学派の研究でありその結果編成されたのが書誌であった。『漢書芸文志』の後に『隋書經籍志』が現れ、ここに四部分類が成立する。以後、20世紀の初めまで中国ではこの四部分類が分類法として使われてきたが、19世紀後半からヨーロッパの影響を受けて新しい分類法の模索が始まった<sup>6)</sup>

このように見てくると、書誌は分類目録の形で始まったわけであるが、ここは各種分類法の比較をするのが目的ではないので、分類法の検討には深入りしない。

今日一般的に編纂される文献目録のように、雑誌に掲載された論文や記事（つまり文献単位）も収録対象となったのは学術雑誌が出現してから後のことである。学術雑誌が最初に出現したのはヨーロッパ（フランスとイギリス）で17世紀の中頃のことであるが、そこに掲載された記事・論文が直ちに書誌に収録されたわけではない。というのは、その当時の学者、例えばデカルトにしてもニュートンにしてもライプニッツにしても、新たな発見や着想を一種の「公開書簡」という形で情報交換を行っていた<sup>7)</sup>。それ故、この当時はまだ「文献目録」が生まれておらず、19世紀になってからそのような書誌が出現したと言っても誤りとはいえないであろう。

#### 2.1.4 文献発生のメカニズム

ここでは、文献発生のメカニズムが学問分野によって異なることについて述

べる。

今、学問分野を自然科学・技術、人文学と社会科学という大枠で捉えると、それぞれの分野での文献発生メカニズムは大略次のようになる。

自然科学・技術分野では、過去の研究成果に立って常に「何か新しいもの」を追究して行き、その研究成果の記録として文献が生まれる。この過程で過去の文献が探索され、また、同時に進行している他の研究者の動向調査が行われる。ここでは、基本的に前進あるのみという傾向が見える。

一方、人文学、殊に古典研究や哲学や歴史の分野では、過去の研究成果を探索すると同時に、研究対象となる原典が存在するので、ここでは「何か新しいもの」を求めながらも原典と過去の文献を読み込むという往復運動が繰り返される。

また、社会科学分野では、自然科学・技術分野の持つ特性を発揮するものと人文学の特性が見受けられるものとが混在している。

以上の概観が妥当であるならば、それぞれの分野で発生する文献を収録した文献目録（即ち、書誌）の姿に相違が生じることは必然である。つまり、それぞれの学問分野に適した書誌が考案されなければならない。

### 2.1.5 書誌の種類

本論に入る前に、これまで作成されてきた書誌の種類をあらためて概観しておこう。ここでは列挙書誌学の成果としてまとめられた列挙書誌の種類について述べる。というのは、今日一般に「書誌」あるいは「文献目録」と呼ばれるものはこの列挙書誌だからである。

③ 列挙書誌の種類分けについてもいくつかの分け方がある。書誌の解説書や書誌作成の手引き書では一次的書誌、二次的書誌、書誌の書誌と分けて解説している<sup>8)</sup>

一次の書誌 文献の主題、形態などにかかわらず包括的、網羅的に収録  
 することを目指したもので、世界書誌、全国書誌、全国的な

販売書誌などである。

- 二次的书誌      一次的书誌が文献を包括的、網羅的に収録しようとするのに対して、二次的书誌は主題、著者、文献の形態などにより、予め焦点を定めてその関連文献を収録したものである。一般的には、一次的书誌に収録された文献から選択して作ることができると考えられ、その故に二次的书誌と呼ばれる。主題書誌、人物書誌、蔵書目録、選択書誌などがあり、さらに、新聞・雑誌の記事・論文を対象とした索引的书誌がある。
- 書誌の書誌      上記の書誌類を収録したリストのこと。

## 2.1.6 書誌の記載事項

書誌の役割が「知の見取図」を示すことであることは既に述べた。そのためには、類似の文献の異同を示すことが必須となる。文献の異同を具体的に示すのは記載された書誌事項である。書誌事項は、図書の場合と雑誌・新聞などの逐次刊行物では多少の相違があり、現在では次のようなものと理解されている。

図書の場合、特に単行書の場合は、標題（タイトル）、副標題（サブタイトル）、著者（編者、訳者等）、版、出版地、出版者、出版年、ページ数、図版、大きさ、叢書（シリーズ）等について、文献そのものに表示されているものを記載する。

逐次刊行物の場合は標題（タイトル）、副標題（サブタイトル）、著者（編者、訳者等）、掲載誌（紙）、巻数号数、出版年月（日）、収録ページ等、文献を掲載しているものに即して記載する<sup>9)</sup>。

以上の形式は、初期の書誌が作成された時から定まっていたものではなく、時代と共に変遷して、今日では上記のようにほぼ定まってきたものである。つまり、図書の数（タイトルの種類）が少なかった時代の記載事項は単純であった。例えば、上記の『日本國見在書目録』では、全体を四十に分類し、その分

類のもとに書名と編（著）者と冊数のみ記載されている。やがて時代がくだるとともに、図書（写本）は増加して異同を識別するために次第に記載される事項が増えてきた。既に写本の時代でも書写された書物には誤写や脱落が起きていたから、書名が同じでも同一でないものが存在していたのである。

印刷術が発明されて同時に多数の複製物が作られるようになると、図書の数は急激に増加した。図書だけではなく著述する者も増加すると同時に読者層の拡大も進んだ。その結果多くの図書が生産され、それらの異同を識別するための書誌記述は次第に詳細になったのである。特に、科学技術が急速に発展した19世紀以降は、学術雑誌の重要性が強調され、それまで図書中心に編成されてきた書誌から雑誌掲載論文に焦点を当てた書誌が求められるようになって、論文・記事の探索にも耐えられるような書誌が出現した。20世紀になると新刊図書数よりも学術雑誌に掲載される論文数の方がはるかに多くなった。そうした論文や記事を探索するための道具として、索引的書誌すなわち記事索引が登場してきた。索引的書誌といわれるのは、索引でありながら、そこにおける記載事項は従来の書誌とはほぼ同様の姿を示しているためである。つまり、事項（用語、人名、地名等）索引からの脱皮であり、ここに今日文献目録といわれる一群の書誌が出現したわけである。

### 2.1.7 結 び

以上見て来たように、意図的か偶然かは問わないとして、人類の知識を盛り込んだ書物が持つような華やかさはないけれども、そうした人類の知識や記録を黙々として残してきた書誌や目録は、後世のための「知識の見取図」をわれわれに示してくれるのである。

この見取図は時代や国や文化によって様々な意匠を示している。そこに示された意匠は書物に盛られた知識の世界をどのようなものと捉え、その世界に不案内な者をどのように案内するのがいいか、というところを出発点として考案されてきたものである。

## 注

- 1) 書誌と索引 堀込静香著 補訂版 日本図書館協会, 1996. 11. p. 15.
- 2) 書誌学入門／ロバート・B・ハーモン著長澤雅男監訳. 日外アソシエーツ, 1984. 7. p. 4.
- 3) 図書館分類=書誌分類の歴史／E・シャムーリン著藤野幸雄訳. 第1巻. 金沢: 金沢文圃閣, 2007. 1. (図書館学古典翻訳セレクション2)
- 4) 日本国見在書目録 藤原佐世撰  
『日本国見在書目録』について, 次のものが比較的披見しやすい.  
日本国見在書目録解説稿／小長谷恵吉著. 小宮山出版, 1956. 12.  
日本国見在書目録-集証と研究-／矢島玄亮著. 汲古書院, 1984. 9.
- 5) 分類するということは人間の根源的な行為なのであろう. この点に関しては,  
分類思考の世界／三中信宏著. 講談社, 2009. 9. (講談社現代新書2014) に次のような記述がある.  
どんなものであってもそれらを分類することは, 私たち人間にとって根源的な行為のひとつである. 「分類するは人の常 (To classify is human)」とは格言そのものだ. …たかさんの対象物をひとつひとつ覚えられるほど, 私たちの脳は性能がよくない. ばらばらの対象物を少数のグループ (群) に分類して整理することによって, はじめて記憶と思考の節約ができる. (p. 33)
- 6) 中国の目録学については次のものを参照した.  
知の座標 中国目録学／井波凌一著. 白帝社, 2003. 11.  
支那目録学／内藤湖南著. 筑摩書房, 1970. 6. (内藤湖南全集第12巻)  
目録学／倉石武四郎著. 汲古書院, 1979. 3. (東洋学文献センター叢刊影印版1)  
なお, 中国における読者層の拡大と出版物の増加および書誌の発生については, 次のものが詳しい.  
中国出版文化史／井上進著. 名古屋大学出版会, 2002. 1.
- 7) 知はいかにして「再発明」されたか／イアン・F・マクニリー, ライザ・ウルヴァーントン著富永星訳. 日経BP, 2010. 9. 「第四章 文字の共和国」でこのことに触れている.
- 8) 書誌に関するものとして, 次のものを参照した.  
書誌と索引／堀込静香著.補訂版. 日本図書館協会, 1996. 11. (図書館員選書19)  
書誌／L.-N. マルクレス著藤野幸雄訳. 白水社, 1981. 3. (文庫クセジュ)  
書誌学入門／ロバート・B・ハーモン著長澤雅男監訳. 日外アソシエーツ, 1984. 7.
- 9) 書誌作成マニュアル／日本索引家協会編. 日外アソシエーツ, 1980. 7.

## 2.2 既存の編年体の文献目録について

2.1.5で書誌の種類を示したが、書誌編纂者の個性が発揮されるのは二次的書誌と呼ばれるものである。今日、二次的書誌は一次的書誌をもとに、そこから必要事項を選択して編纂されるものと解されているが、果たしてそうであろうか。この種の書誌を作成するに当たっては、一次的書誌の探索から始めて既存の二次的書誌の探索を行い、さらに各文献に付された注や引用・参考文献からも関連文献を探索して最初のリストを作り、次にそれらの文献の実物を手にして記録をとる。

このように二次的書誌といわれる主題書誌、人物書誌、索引的書誌等にあつては、単純に一次的書誌から関連文献を抽出しただけでは、不十分な欠落の多い書誌しかできないのである。ここでは書誌作成の原点に立ち返って、文献そのものと対しながら記述(即ち、見取図)を作成しなければならない。ここに、一次的書誌では表現できなかったさまざまな工夫が施されることになる。そのことを具体的な例で明らかにしたい。

### 2.2.1 『日本におけるバルザック書誌』の場合

1969年6月に刊行された『日本におけるバルザック書誌』は、当時のわが国では珍しい書誌であった。現在でも、この書誌を手本とした新しい書誌は出されていない。以下、目次を示し、「凡例」と「あとがき」からこの書誌を編纂した意図を探ることにする。

日本におけるバルザック書誌／原政夫著。 東京：駿河台出版社，

1969.6. 209p. 図12p. 22cm.

#### 目次

はしがき .....	[1]
第一部 バルザックの作品の邦訳目録 .....	3-51.
[第一部凡例 .....	5]

第二部 バルザック邦語参考文献目録	53-173.
[第二部凡例	55]
第三部 バルザックの作品の翻刻対訳一覧	175-178.
第四部 バルザックの作品の本邦初訳一覧	179-194.
[第四部凡例	181]
索引	195-207.
[索引 凡例	197]
第一部 1 Index alphabétique de titres	199-201.
2 訳者名索引	201-203.
第二部 1 著者・執筆者名索引	204-206.
2 訳者・編者名索引	206-207.
あとがき	208-209.

以上の構成であるが、第一部と第二部に収録された文献は通しの文献番号が付されており、第三部と第四部はそれぞれ独立に文献番号が付されている。また、索引は第一部と第二部に対するものであり、そこではこの文献番号が指示されている。

この書誌はバルザック研究に携わってきた研究者が、研究の傍ら収集してきた文献に評価を加えて、つまり解題したものである。

まず、全体の「はしがき」で著者は「文学作品はなんでもかんでも原典で読まなくてはならぬと固く信じていた」が、三十代になった時、バルザックの中編小説を翻訳することになって、他人がどうやっているか気になり種々の邦訳を原文対照して読んだり英訳、独訳にも目を通した、という。その結果、「翻訳でバルザックを読むのも悪くない」と思うにいたり、そこからバルザックに関する邦語文献収集が始まった。著者自身「生まれつきの凝り性」なので、全国の古書店を漁り、6年ほどで当時入手できるものはほぼすべて収集したので、それを整理してこの書誌を作った。つまり、書誌作成の原点である「網羅

的収集」を実行したわけである。収録対象となった期間は明治元年（1868年）から昭和43年（1968年）である。なお、本書誌の主要部分は第一部と第二部であるので、それを中心に見て行く。

第一部の「凡例」から。

- 1 この目録は、明治元年（1868年）より昭和43年（1968年）4月までの間にわが国で刊行されたバルザックの作品の翻訳について、筆者が今日までに調査し得たものすべてを整理したものである。
- 2 目録作成に当たってはすべて現本について記事をとった。ただし二、三点、傍証によりその存在が明らかでありながら、現本未入手のため記事をとれなかったものがある。それらについては当該項目でその旨のことがきをしておいた。
- 3 項目の排列は、あえて編年体をとらず、邦訳題名のアルファベット順（ヘボン式ローマ字つづりによる）とした。このほうが目録利用者には便利かと考えたからである。なお同一邦訳題名のものは刊行年月順に排列した。
- 4 この方式もけっして十全とはいえないので、別にバルザックの邦訳全作品について「本邦初訳一覧」を編年体で作成し、さらに原題名による索引 *Index alphabétique de titres* を作った。これら三者を対照すればわが国におけるバルザック翻訳の全貌と特徴的な様相がほぼ把握できると思う。
- 5 各項目の記事は、邦訳題名、原題名、訳者名、出版社名、収録双書名（『 』で示す）または収録雑誌名（「 」で示す）、刊行年月名の順である。「～の内」と注記してあるのは同一（双）書のうちに他の作品とともに収録されていることを示す。
- 6 漢字、かなづかいはいすべて現本の表記に従った。
- 7 便宜上、各項目の前に通し番号を付した。
- 8 [略]

第二部の「凡例」から、

- 1 この目録は、明治元年（1868年）より昭和43年（1968年）4月までの間にわが国で刊行されたバルザック邦語参考文献について、筆者が今日までに調査し得たものを整理したものである。
- 2 バルザックに言及しているすべての文献をこの目録に収録したのではなく、文学的意義により適宜取捨した。[略]
- 3 最初からこの目録の対象から外したものをあげておく。各種の百科辞典、文学辞典、文学史、文学講座類におけるバルザック関係の記事である。…ただし少数の例外はある。
- 4 項目の排列は編年体とした。
- 5 各項目の記事は、著者あるいは執筆者名、(訳者名)、書名あるいは題名、収録誌(紙)名、出版社名、刊行年月名、(原題名)の順である。
- 6 各文献に短評を加えたが、これは筆者の私見であることはいうまでもない。重要と思われる文献については、しばしばかなりの原文引用をしたこともおことりしておく。
- 7 漢字、かなづかいはすべて原文、原本の表記に従った。
- 8 便宜上、各項目の前に第一部に続けて通し番号を付した。

この二つの「凡例」から見て取れるのは、

- ①収録期間を明示し、調査できた翻訳文献をすべて収録したこと
- ②目録作成にはすべて現本をもとに記事を作ったこと
- ③翻訳文献の項目排列は編年体ではなく、邦訳題名のアルファベット順にしたこと
- ④その不備を補うために「本邦初訳一覧」と「原題名の索引」を付したこと
- ⑤邦語参考文献目録では、関係文献を選択収録し、項目の排列を編年体としたこと

- ⑥翻訳文献には短評を加えず，邦語参考文献目録には短評を付したこと
- ⑦漢字，かなづかいはすべて現本の表記に従ったこと
- ⑧各項目に通し番号（所謂，文献番号）を付したこと

以上の中で，②は書誌作成の原点であり，⑦はこの「凡例」の中でゴシック体で強調してある。つまり，現本重視の立場を強調している。また，索引で指示されるのは⑧の通し番号である。因みに，第一部は1～374までと追録4点であり，第二部は375～641である。

次に，第二部の方では単行本，雑誌掲載論文を収録しているが，単行本ではその標題からバルザックを扱っているかどうか判断できないもののがかなりある。著者の博搜を示すものであろうが，それらの単行本の目次を示す労を略されたのが心残りである。著者が重要と判断した文献（例えば，アーサー・シモンズの『象徴主義の文学』）は煩を厭わず目次をすべて記録しているのであるから。

### 2.2.2 『日本人のニーチェ研究譜 書誌篇』の場合

ここで取り上げるのは，1982年9月に白水社から刊行された『ニーチェ全集』の別巻『日本人のニーチェ研究譜』に収録されている「書誌篇」である。

この『日本人のニーチェ研究譜』は全体が二部構成となっており，前半が「書誌篇」で後半が「資料文献篇」となっている。書誌篇の方は高松敏男編で，資料文献篇は西尾幹二の編集である。

日本人のニーチェ研究譜。 東京：白水社，1982.6. 545p. 図2  
p. 20cm. (ニーチェ全集 別巻)

#### 目次

- I 書誌篇（高松敏男編）……………5-284.
- [凡例]……………7-8]
- 一 ニーチェの著作の翻訳（語録・書簡・詩を含む）……………9-38.

(一) 単行本	11-17.
(二) 単行本一部所載	18-22.
(三) 一般全集類所載	23-27.
(四) 文庫・新書	28-31.
(五) ニーチェ個人全集・選集	32-38.
二 ニーチェに関する研究文献	39-280.
(一) 単行本及び単行本所載研究文献	40-198.
[凡例]	41-43]
(A) 日本文献の総覧	44-145.
(B) 外国人の訳書文献総覧	146-198.
(二) 新聞・雑誌・紀要等所載文献	199-274.
[凡例]	199]
(三) 『月報』所載文献	275-280.
補記	281-282.
編者後記	283-284.
II 資料文献篇（西尾幹二編）	285-536.
[目次]	[286-288]
(一) 明治期その一	289-352.
(二) 明治期その二	353-420.
(三) 大正期	420-456.
(四) 昭和期	457-507.
この九十年の展開（西尾幹二）	509-536.
付 ニーチェ作曲作品演奏会記録	537-545.

この『日本人のニーチェ研究譜』は概ね縦書き二段組みでできている。ここでは第一部に当たる「書誌篇」について考察する。

この「書誌篇」の編まれた意図は、上記目次に補記した三つの「凡例」によっ

てたどることができる。

まずこの書誌の全体構成は、上記の目次に見るとおり「ニーチェの著作の翻訳（語録・書簡・詩を含む）」「ニーチェに関する研究文献」の二部から構成されており、さらに、それぞれがいくつかに分けられて詳細をきわめている。なお、以下に引用する「凡例」について、「知の見取図」を捉えるのに必須と思われる事項は転記したが、副次的と思われるものは煩瑣を避けるため一部省略し、〔略〕と注した。

最初の凡例 これは、この書誌全体に対する凡例である。

- 1 収録期間 明治26年から昭和54年末まで、日本に於けるニーチェについての資料を網羅したもの。
- 2 教科書、辞典類所載事項、地方新聞、大学新聞、政党新聞、同人誌、PR誌を収録対象から除外。
- 3 排列はすべて刊行年月の編年体。
- 4 単行本の書名等の表示は、原則として内題（扉）を用いた。
- 5 頁数は現本記載のものを用い、本文以外の頁付のあるものは「」で区切った。
- 6 現本未確認、またはなお調査を要するものに記号を付した。
- 7 〔 〕は補記に使った。
- 8 使用した参考資料は、先行するニーチェ関係書誌3点と国立国会図書館の雑誌記事索引。
- 9 「単行本及び単行本所載研究文献」「雑誌・新聞・紀要等所載文献」については、別に〔凡例〕を付す。

#### ニーチェに関する研究文献の凡例

##### 1 「単行本及び単行本所載研究文献」の凡例

###### 1 書誌的な事柄について

- (1) 「日本文献」と「翻訳文献」に分け、原則としてそれぞれ最初の発行、

または所載を項目に掲げ、ランニングナンバーをつけた。

- (2) その他の文献は、〈参考〉に列記した。
- (3) 各項目内は、著訳編者名（または監修者名）、『書名』、巻号、〈叢書名〉、発行年月、発行所、判型、頁数、〈内容〉、〈参考〉、（注）の順とした。
- (4) 〈内容〉の部分の見出項目は、便宜上《 》〈 〉「 」（ ）の順に小項目とし使い分けた。

## 2 項目に収録したものと、除外の範囲について

### (1) 収録したもの

- ①同一内容のものであっても、書名、出版社が共に変わっているもの、または共に変わっているものに収録されているもの。
- ②書名が変わっているもの。または変わったものに収録されているもの。
- ③原著者が同一であっても、訳者の異なるもの。

### (2) 除外したもの

- ①同一書名で発行所だけが異なっているもの。
- ②書名、発行所が共に異なっても、全集類に再録されたもの。
- ③初出が全集で、のち単行本になっているもののうちの全集。
- ④「哲学史」「哲学概論」「文学史」の一部に所載の少頁のもの。
- ⑤訳書に付随した「小伝」「解説」等で独立した内容を持たないもの。

### (3) その他〔略〕

## 3 文字の統一について

単行本及び単行本所載研究文献に限って、各項目の主記入にあたる「著訳編者名」等と、「書名」、「叢書名」は時代に関係なく現本表示のままとした〔略〕。その他記載は昭和二〇年以前に発行のものはすべて旧漢字に、それ以後のものについては新漢字とした。

## 4 「翻訳文献」の原典について 〔略〕

## 5 外国人著者の表示について 〔略〕

## 2 「新聞・雑誌・紀要等所載文献」の凡例

- 1 「美的生活論争」に関する文献は、広く収録した。
- 2 無署名、匿名のもののうち、執筆者名の判明したものについては、〔 〕で補記した。またフルネームに欠けるものについても、同様に補記した。
- 3 ニーチェの著作からの訳文、訳詩、抄訳については、特に〔訳文〕と明記した。〔略〕
- 4 同時代に同名の誌名などがあって混同を起しやすい雑誌名については、発行所名等を加えた。紀要等においては、大学名をしるした。
- 5 〔略〕
- 6 〔略〕

以上、三つの凡例を眺めてみると、この書誌も現本に依って作成されたものであることがわかる。また、関連すると思われる文献を博搜したことが窺え、網羅性を意図したことも窺えるのであるが、結果として、前述の『日本におけるバルザック書誌』と同様に、収集した文献を篩にかけたことがわかる。

次に、収録した項目の排列を一貫して編年体で通したこと。このことによって、ある時期にどのような翻訳書、研究論文があったかを少々手間取るにしても把握できることになる。

文献収集に際して、先行する書誌を参考にするのは当然のこととして、実際の作業は、上記した一次的書誌をもとに選択的に作成されたものではないこと、否、一次的書誌から事項を選択しただけでは作成できないことを示している。

この書誌に収録された膨大な文献を「知の見取図」として構成するには、さまざまな方法が考えられるが、この編者はここに示された構成を採用したものと思われる。この構成が「知の見取図」として入門者に使いやすいものであるとは必ずしも言い難いが、入門者でも根気よくこの書誌とつきあうことで、その人なりの見取図を描くことができる。

文献番号は「ニーチェに関する研究文献」のうち「単行本及び単行本所載研究文献」の部分にのみ付されており、「日本文献」と「外国人の訳書文献」に分けてそれぞれ番号が付されている。

『日本におけるバルザック書誌』とこの『日本人のニーチェ研究譜 書誌篇』の違いは、前者がバルザックの研究者であるが故に収録した文献に短評を加えていた（即ち、文献の評価をしていた）のに対し、後者では文献の価値判断をこの書誌の利用者に委ねていることであろう。それは編者が長年図書館に勤務していたことと無関係ではないように思われる。即ち、「敢えて」文献の価値判断をせずに置いたのではなかろうか。

最後に、「無い物ねだり」と言えるかも知れないが、この書誌にせめて「著訳編者索引」が付されていれば、ニーチェの世界への入門者にとって、さらに使いやすい案内図となったであろう。

なお、この書誌の補記の部分は「広告の掲載があつて、未刊のものに下記のものがある。」として、刊行計画が予告されながら陽の目を見なかったものの一覧である。多くの書誌の中で、ここまで丁寧に調査して記録したものはこれまでなかったのではなかろうか。

### 2.2.3 ベルクソンの場合

ここでは P. A. Y. Gunter の編纂した *Henri Bergson : a bibliography* の第2版の構成を検討する。今手許にある P. A. Y. Gunter のベルクソン書誌を取り上げる。これは初版が1974年に刊行されたもので、手許のものはその改訂第2版である。原書名とその目次を次に掲げる。第3版は今のところ刊行されていないようである。

*Henri Bergson : a bibliography* / P. A. Y. Gunter. Rev. 2nd ed. の場合

*Henri Bergson : a bibliography* / P. A. Y. Gunter. Rev. 2nd ed.

Bowling Green, Ohio : Philosophy Documentation Center, Bowling

Green State University, 1986. 557p. 24cm.

### Contents

Part I – Introduction .....	1
Part II – Works By Bergson .....	16
Part III – Works Concerning Bergson .....	86
Part IV – Sources .....	508
Part V – Index .....	515
Works By Bergson .....	515
Works Concerning Bergson .....	524

第一部は、この書誌の編者によるベルクソンの解説と編纂の経緯についてまとめたものである。

第二部は Bergson の著作を編年体で編成したもので、1877-1940 の間の著書・論文・記事等を収録しており、文献番号は1-470まで。主要な著書・論文には解説が付されている。著書・論文のうち外国語に翻訳されたものは、それぞれの著書・論文の解説のあとに、標題のアルファベット順に排列している。ここには邦訳文献の一部が収録されており、邦訳標題をローマ字（ヘボン式）に翻字している。なお、外国語への翻訳文献には文献番号が付されていないが、大変な量にのぼる。

第三部は Bergson 研究論文・記事を発表年順に編年体で編成している。同年に発表されたものは標題のアルファベット順排列である。文献番号は1-5926で期間は1880-1985年である。ただし、文献番号の2147-2156は記述がない。このことは第一部の最後に欠落の理由が注記されている。なお、ここに採録されているのはヨーロッパの主要言語で発表されたものに限り、日本人の論文・記事は収録されていない。また、重要な論文には簡単な解説が付されているのは第二部と同様である。

第四部は、この書誌を編成するのに使用した情報源の一覧である。ここにも

わが国のものは含まれていない。

第五部は、第二部と第三部に対する索引である。しかし、第二部に収録されていた邦訳に対する索引項目は見出せない。

この書誌の特徴はなにかといえば、まず Bergson の著作を年代順に並べ、主要なというか重要な著作には解説を施していることと、それぞれの著作の外国語への翻訳がある場合は、対応する著作のもとに集めていること、次に、Bergson に関する研究論文・著作を発表年の順に集めていることと解説を施していること、この2点である。

一方、この書誌をもとに、Bergson がどのように周辺諸国へ伝わっていったかという面では、この書誌を使う者がその人なりに構成の模様替えが必要になるし、序文（第一部）で編者が断っているように、収録対象としたのは研究論文に限定してその他の記事を収録対象から外していることがわかる。そのため、Bergson がフランス語以外の言語圏、国々でどのように受容されたかという現象面を捉えようとする、別の書誌が必要になる。つまり、この書誌は Bergson を研究しようとする者には大変便利ではあるが、一般読者には一種近づきにくい感じを与える。

### 2.3 受容史研究のための編年体文献目録の試み —『ベルクソン書誌—日本における研究の展開』の場合—

上記の書誌にならって凡例の概要を示す。

ベルクソン書誌 —— 日本における研究の展開／郡司良夫編著。

金沢：金沢文圃閣，2007. 1. 256p. (文圃文献類従 10)

#### 目次

はしがき	5-6.
凡例	8-9.
第一部 編年体書誌の部 1910(明治 43)年～2004(平成 16)年	11-174.
第二部 五十音順著者索引	177-254.

あとがき .....	255-256.
------------	----------

## 凡 例

- 1 収録期間は1910～2004年。全体を二部構成とし、第一部は図書および論文が公にされた順に記載。第二部は図書および論文の著者、翻訳者、序文および解説等の執筆者を含む関係者のもとに書名、論文名等を記したリスト、必要に応じ「\*」印のもとに種々の注記を付す。
- 2 図書に関する記載事項  
書名 著者／翻訳者（編者） 出版事項 ページ数／図版／大きさ  
とし、目次と収録ページを示した。
- 3 論文に関する記載事項  
著者： 論題 掲載誌 巻号 年月 収録ページ  
とした。
- 4 第一部では各年のはじめに「図書」として単行本の刊行年月順に記述を排列した。同一年月に刊行された図書は書名の五十音順とした。図書の次に「論文」の記述を集め、著者の五十音順に排列した。同一著者の論文は発表順に排列した。
- 5 第二部は人名の五十音順とし、同一人に関する記述は図書を先に掲げ、論文には頭に「・」を付して区別した。翻訳書は著書と区別するために、頭に「翻訳」の文字を追加した。
- 6 第二部は独立した文献目録として使用できるように、単なる著者索引ではなく、論文名、掲載雑誌等第一部での記述を活用してある。
- 7 Bergson の日本語表記は「ベルグソン」と「ベルクソン」の両方存在する。

この書誌の場合も『日本におけるバルザック書誌』『日本人のニーチェ研究 譜 書誌篇』と同じく、日本国内で発生したベルクソン文献（翻訳、論文、記事など）を収録したものである。当然のことながら、この二つの書誌を参考に

しつつ、「ベルクソンの見取図」をどのように作ろうか、と考えた。

文学にしても哲学にしても、外国のものがわが国に入ってきて、一般読者に紹介され、その研究が始められる流れをイメージすると次のようになるだろう。

- ① まず誰かが話題となっている作品や人物の紹介記事なり論文なりを発表する。
- ② その人物の代表作(あるいは、話題となっている作品)の翻訳が行われ、一般読者の目にとまる。同時に、研究論文が出始める。
- ③ やがて、本格的な研究書が発表されるようになる。同時に他の著作の翻訳も刊行されるようになり、研究論文の数も増えて行く。
- ④ 研究者が増加するに従って、雑誌で特集が組まれたり、シンポジウムが開催されたりすると同時に、翻訳の著作集が刊行されるようになる。

このような流れを書誌として表現するためには、これまで取り上げてきた書誌の編成方法では無理がある。文献収集の網羅性、現本を重視した記録の作成までは基本中の基本である。そこで作られた記録をいかに並べるか。これまでに編年体で編纂された多くの書誌では、図書(単行本)と論文や記事に大別して別々に編集されてきた。このスタイルでは、図書や論文が同時発生する現実を、無理に分けているので、その書誌の利用者はそれぞれを個別に検索し、自分の中で時間軸に合わせて再構成しなければならない。

さて、ベルクソンの場合である。ニーチェに較べて文献の数がはるかに少なかったこともあるが、上記のような受容の流れを示すために、当面は二部構成にすることにした。

第一部は編年体で編成し、同年に刊行された翻訳書、研究書、論文をひとまとめに排列する。その中での排列は図書(単行本)を先に置き、そのあとに論文を載せる。このようにすることで、日本におけるベルクソン関係の文献が、いつどのように発生してきたかを見通せるわけである。

第二部は著訳編者の五十音排列とし、それぞれの人名のもとに図書、論文を

排列した。図書と論文を区別するために、論文には本体と同じ記号を付した。さらに、ある論文が後に論文集や全集に収録されている場合は、その論文の見出しの終わりに注を付し、それを収録している全集、論文集で確認したうえで、その収録位置を示した。

以上の操作をすることで、研究の進展を概観できる、あるいは案内図として道標を提示できる。

なお、文献収集には各種の目録（帝国図書館蔵書目録、国立国会図書館のOPAC等）や雑誌記事索引を利用したほか、各論文の注や参考文献等を使用し、可能な限り実物を手にして記録を作成した。先行する文献目録類で存在することが分かっているものでも、この書誌作成の時点で入手できなかったものについては、見出しの先頭に「未見」と表示し、後日、確認できたところで追補することにした。「追記」補遺編を編む段階で約50点の文献を新たに確認できた。

## 2.4 結 論

以上、先行する編年体の文献目録を見てきた。同じ編年体の文献目録でも、筆者の試みたところをここにまとめてみる。

筆者の立場は「文献目録＝知の見取図」と考える立場である。このことは、文献目録を単なる検索道具の一つ、という限られた機能から解放することを意味するだろう。その見取図をどのように構成するか、構成の仕方によってはさまざまなものが考えられるであろう。

ここでは、バルクソンを例にとって、受容史研究の資料となる文献目録の編成についてまとめる。

この文献目録の要件は、

- ① 関連文献を網羅的に収集する。
- ② 図書、雑誌論文という枠にとらわれず、ある時期にどのような文献が出現したかを確認できるように、収集した文献を編年体で編成する。
- ③ 索引はそれ自体文献目録となるようなものが望ましい。

その効果としては、

- ④ 編年体文献目録を一巻の絵巻物として眺めることで、さまざまな受容の局面を想像することができ、受容史を構想することができる。
- ⑤ 受容史というと、往々にして研究者集団の活動にポイントを置かれがちだが、社会がどのように受け容れていったかという観点から、一般読者が手に取りやすい状況がどのように展開したか、ということも理解できる。
- ⑥ 索引の作り方次第では、そのテーマの中心となる研究者の存在を明らかにでき、また、研究者が世代交代して行く様子、あるいは研究者の関心の変遷や展開も観察できる。

上記 2. 3. で示した『ベルクソン書誌——日本における研究の展開』は以上の効果を期待して編纂した。なお、上記⑤の一般読者がベルクソン関係図書（翻訳書、研究書、解説・入門書）を手にしやすくなってきた様子を示すために、本論稿の附録 2 として「ベルクソンの著作の翻訳および研究書等の刊行一覧 1913～2013」を作成して添えた。

また、③および⑥の例として、『ベルクソン書誌—日本における研究の展開 補遺編』の著者索引から引用して示す。これと本編の索引を合わせれば研究論文発表の開始時期が分かる。例えば、ここに引用した杉山直樹の場合、ベルクソンに関する論文を最初に発表したのが 1993 年のことであり、2002 年までに 12 本の論文を発表していること、それに続くものが、ここに引用したものである。なお最初の文献は彼の論文集であり、1 行空けた後に「・」を付して続くのが論文である。（最初の論文は、本編刊行後に入手したので、補遺編で補ったものである。）

『ベルクソン書誌——日本における研究の展開 補遺編』の索引からの引用

杉山直樹（スギヤマ ナオキ）

ベルクソン 聴診する経験論 東京：創文社 2006.10. vii, 337,

36p. 22cm.

- ・未来を思考すること 『アルケー』 1 (関西哲学会年報通巻28),  
1993. 6. pp. 72-81.
- ・スピリチュアリズムの冒険 —ベルクソン研究の現況をめぐって  
『創文』 472, 2005. 1. pp. 44-47.
- ・「知性の発生と科学論」——『創造的進化』の解読のために 『ベル  
クソン読本』 2006. 4. pp. 81-91.
- \*ベルクソン読本 久米博, 中田光雄, 安孫子信編 東京: 法  
政大学出版局 2006. 4. ix, 403, vip. 22cm.
- ・石井敏夫氏の作品について 『ベルクソン化の極北』 2007. 11.  
pp. 289-309.
- \*ベルクソン化の極北 石井敏夫論文集 石井敏夫著 東京:  
理想社 2007. 11. 321, 12p. 肖像22cm.
- ・精神の場所——エピステモロジーとスピリチュアリズムとの間で  
『フランス哲学・思想研究』 12, 2007. pp. 39-48.
- \*[日仏哲学会] 2007年春季シンポジウム: 19世紀フランス・エピ  
ステモロジーとベルクソン
- ・フッサールとベルクソン——二つの「幾何学の起源」 『哲学雑誌』  
(哲学会) 124 (796), 2009. pp. 28-44.
- \*フッサールとベルクソン——生誕150年

### 第3章 わが国におけるベルクソン受容の歴史

ここでは『ベルクソン書誌——日本に於ける研究の展開』とその『補遺編』をもとにわが国におけるベルクソン受容史のパノラマを提示したい。前者を「本編」と、また、後者を「補遺」と呼び、2004年までは主に本編をもとに話を

進め、2005年以降は補遺に従って話を進めることにする。(2004年以前の図書・論文で、本編刊行後に入手したものは補遺編に収めている。)

なお、最後に「附録1 わが国におけるベルクソンの著作の翻訳および研究書等の刊行年表 1913～2013」と「附録2 ベルクソンの著作の翻訳および研究書等の刊行一覧 1913～2013」を付した。これは、単行本の刊行がどのように変遷してきたか、つまり、一般読者の目に触れる機会が次第に拡大してきたことを示すためである。

先ず、ベルクソンについて簡単な紹介から始める。

### 3.1 ベルクソンについて

ベルクソンの名がわが国にいつ頃伝わり、彼の著作がわが国にいつ頃入ってきたかという点は詳らかでないが、宮山昌治の「純粹持続の効用－大正期ベルクソニズムと戦争－」によれば、「明治四十一年に、吉田熊次がごく簡単にベルクソンを取りあげた。これが日本で最初のベルクソン紹介だが、一文で触れたのみである。」と記している。<sup>1)</sup>

わが国におけるベルクソン受容史をたどるにあたって、本論稿では、便宜的に四つの時期に分けた。さらに、第四期については10年単位に四つの時期に分けてたどることにした。

ベルクソン（正しくは Henri-Louis Bergson、通常は Henri Bergson と書かれ、本論稿ではベルクソンと記述する。）はわが国では既によく知られているが、最初に彼の著作について簡単にまとめて置きたい。

ベルクソンは1859年10月18日にパリに生まれ、1941年1月4日にドイツ占領下のパリで死去した。

ベルクソンの名が世に知られるようになったのは、1889年にパリの Felix Alcan 社から刊行された『意識に直接与えられたものについての試論』*Essai sur les données immédiates de la conscience* によってである。これは彼の学位請求論文であった。この論文が外国語に翻訳されたのは1910年のことで、F.

L. Pogson による英訳本がロンドンの Swan Sonnenschein 社およびニューヨークの Macmillan 社から刊行された。この翻訳では標題が ‘Time and Free Will’ となっている。この標題については原著者ベルクソンの了承を得たものである。ドイツ語訳は Paul Fohr の訳で 1911 年にイエナの Diederichs 社から刊行されている。標題は ‘Zeit und Freiheit: Eine Abhandlungen über die unmittelbaren Bewusstseinstatsachen’ である。いずれも「時間と自由意志」であり、日本語訳でも坂田徳男の訳以来、『時間と自由』として知られている。もっとも、近年では原題の通り『意識に直接与えられたものについての試論』という標題の翻訳が出始めている<sup>2)</sup>

以後、1896 年に『物質と記憶』Matière et mémoire: Essai sur la relation du corps avec l'esprit を刊行。1900 年に『笑い』Le Rire: Essai sur la signification du comique を刊行。1907 年に『創造的進化』L'Evolution créatrice を刊行。1919 年には論文集『精神のエネルギー』L'Energie spirituelle: Essais et conférences を刊行。1922 年に『持続と同時性』Durée et simultanéité: A Propos de la théorie d'Einstein を刊行。1932 年に『道徳と宗教の二源泉』Les Deux sources de la morale et de la religion を刊行。1934 年には『思想と動くもの』La Pensée et le mouvant を刊行した。

ところで、我が国では Bergson のカタカナ表記として「ベルグソン」と「ベルクソン」が使用されている。この表記に関しては一つの歴史があるといえる。簡単に言えば、昭和 44 年（1969 年）に中央公論社から刊行された『世界の名著 53 ベルクソン』（澤瀉久敬責任編集）が世に出て以後、「ベルクソン」と表記するものが増え、現在ではほとんどがこの表記に従っている。この表記の違い（表記のゆれ）が生じた経緯については、同書に付された月報掲載の澤瀉久敬と前田陽一の対談が明らかにしている<sup>3)</sup>

このことは一見些細なことのように思われるが、文献探索を行う上で無視できないことなので、ここに記しておく。

### 3.2 第一期：明治の終わりから関東大震災まで

前に引用した宮山昌治の論文によれば、吉田熊次が『哲学雑誌』明治41年3月号でベルクソンを1行で紹介していることを述べた後、「ベルクソン流行の火つけ役となったのは、明治43年に発表された西田幾多郎の「ベルグソンの哲学的方法論」で、ベルクソンの理論的な紹介という意味では、この論文が最初のものである。」と述べている<sup>4)</sup>。

しかし、このブームは「大正4年頃には急速に終焉を迎え」、代わってタゴールが日本の思想界やジャーナリズムの話題となり、大正の初め(1914年)に我が国を訪れている。インド生まれのタゴールは1913年にノーベル文学賞を受賞し、話題性があった。

ここでは、西田幾多郎とベルクソンのかかわり、および夏目漱石のベルクソン評を紹介し、ベルクソン受容の一端を示す。この第一期で特に西田幾多郎と夏目漱石に触れた理由は、西田幾多郎が明治41年(1908年)の段階で既にベルクソンの思想を重視し始めていることであり、夏目漱石の場合は英訳の『時間と自由』が刊行されると直ちに入手し、丹念に読んでいることである。これは大正初期のベルクソン・ブーム到来以前のことであり、日本ではほとんど知られていない時期である。さらに、後に引用する西田幾多郎の新聞記事(ベルクソン逝去の報についてのインタビュー記事)で、彼の主著『善の研究』にベルクソンが多大な影響を与えたことを知った。この点から、わが国におけるベルクソン受容史を始めるにあたって、特にこの二人を取り上げたのであるが、第二期以降は特定の個人に触れることを極力避けている。ただし、漱石はベルクソンについて言及はしているものの、ベルクソンに関するまとまった文章を残しているわけではない。それ故、本論稿の趣旨からすれば、横道に逸れることになるが、彼の場合はベルクソンの『時間と自由意志』(と彼は書いている)を読んで感銘を受けて以後に残された小説の中で、ベルクソンがどのような影を落としているかを探らなければならない。これは文学研究者の仕事であろうと思われるので、ここでは深入りしないが、最近この点に着目した研究論文が

少しずつ発表されるようになった。時代は隔たるが、同様のことは小林秀雄についても言える。小林秀雄の場合は後述するように、「感想」と題したベルクソン論を展開したが、途中で放棄してしまった。しかし、彼は評論の中で折に触れてベルクソンに言及していることは周知のことである。

なお、ここで一言お断りして置かなければならないのは、ここに取り上げた西田幾多郎の日記および夏目漱石の蔵書への書き込みを『ベルクソン書誌－日本における研究の展開』に採録していないことである。その理由は、この書誌に収録した文献が図書、論文・記事を念頭に置いているため、個人の日記、書簡およびメモから拾い上げることをしていないためである。しかし、それでは本論稿における他の記述とバランスがとれないことになる。この点は本論稿からはみだした部分であることを認めて削除すべきであるかも知れないが、一方、ベルクソン受容史を考える上で、この二人の記事は受容初期の重要な事実と思うので、敢えてこの二人の日記と蔵書の書き込みから本論稿における「ベルクソン受容史」を書き起こしたわけである。

西田幾多郎にしても夏目漱石にしても、彼らの「知的生産の場」を窺わせる文献目録を別に作成しなければならないわけで、このような文献目録の作成は、第4章の最後でも述べていることであるが、今後の課題の一つであると考えている。

### 3.2.1 西田幾多郎とベルクソンのかわり

ベルクソンの著作がいつ頃日本に入ってきたか、今のところ正確には分らない。ただ、ベルクソンに関する国内文献を辿って行くと、明治43年（1910年）雑誌『藝文』に西田幾多郎が「ベルグソンの哲学的方法論」を発表したのに出会う。恐らくこれが我が国で最も早く書かれたベルグソン論であろう。このことは既に引用した宮山の論文でも触れている。雑誌『藝文』は明治43年2月に創立された京都文學會から出されていたもので、創刊は同年4月である。<sup>5)</sup>

西田幾多郎は明治 30 年から死の直前（昭和 20 年 6 月）までの日記を残している。今、それは岩波書店から刊行されている『西田幾多郎全集』第 17 巻に収められている。<sup>6)</sup>

西田幾多郎は大変几帳面に日記を記している。彼の残した日記には一時期ベルクソンの名がしばしば出てくる。最初は明治 41 年 2 月 26 日のところである。

明治 41 年 2 月 26 日

Bergson – Les Données immédiates.

これは西田がフリースレンデル書店へ注文した図書の中に見えるものである。このあたりが、恐らく Bergson の著作を我が国へ招来した時期に当たるのではないだろうか。

この Les Données immédiates は、我が国では『時間と自由』という名で知られているが、これは最初の外国語訳である F. L. Pogson の英訳本‘Time and Free Will’に由来するものである。この英訳本は 1910 年に初版が刊行されたもので、これについては、後述する夏目漱石のメモが残されている。因みに、独訳は 1911 年のものが最初である。<sup>7)</sup>

もう少し、西田の日記から転記しておく。

明治43年（1910年）

3月13日(日) ベルグソンなどよむ。

4月7日(木) ……ベルグソンをよむ。

6月30日(木) ……ベルグソン到着す。

9月29日(木) 午前学校に行く。Bergson の哲学概論かり来る。

10月7日(金) ……夜に桑木より端書来り、ベルグソンを書くことを依頼し来る。

10月8日(土) ……夜ベルグソンの伝をかく。

10月9日(日) ベルグソンをよむ。

10月10日(月) けふベルグソン論を草す。

10月11日(火) 終日ベルグソンをかく。

10月14日(金) 午前ベルグソンを了る.

明治44年(1911年)

1月11日(休) 夜ベルグソンをよむ.

1月19日(休) 午前学校に行く. ベルグソンをかり来る.

1月21日(土) ……L'Evolution Créatrice をよみ始む.

2月3日(金) Bergson 大半読了.

2月12日(日) ……小田切へベルグソンを返す.

8月13日(日) ……Bergson 注文.

9月10日(日) ……「學術教育界」の豊原よりベルグソンを依頼し来る.

9月11日(月) けふよりベルグソンをかき始める.

9月15日(金) けふベルグソンかき了る.

10月17日(火) Bergson 到着.

10月18日(水) ……山崎へ Bergson を送る.

11月19日(日) ……堀尾よりベルグソン送り来る.

明治45年(1912年)

4月11日(休) ……けふ Bergson の La perception du changement をよんだ.

大正元年(1912年)

9月11日(休) ……午後学校に行き Cohen 及 Bergson の Laughter をかり来る.

12月12日(休) 午後講義. 丸善注文. Bergson, Nelson, Russell

以上、西田幾多郎の明治の終わり頃の日記にはベルクソンの名がしばしば現れる。また、ベルグソン論の執筆が二回出てくる。明治43年と44年である。念のため、全集に収められた「年譜」で確認すると、日記の記述と年譜の記述に違いが出てくる。

年譜では明治43年8月の項に

「ベルグソンの哲学的方法論」を『藝文』に発表.

同じく明治44年11月の項に

「ベルグソンの純粹持続」を『教育學術界』臨時増刊「最近學藝大觀」に発表.

と出ている. 上記の日記の記述と照合すれば, 明治43年10月8日から14日にかけて執筆されたのが前者, 即ち『藝文』掲載の「ベルグソンの哲学的方法論」であり, 後者「ベルグソンの純粹持続」は明治44年9月11日から15日にかけて執筆されたものであることが分かる. であるならば, 年譜の記述は訂正されなければならないだろう. 論文執筆前に発表ということは考えられないからである.

雑誌『藝文』は明治43年2月に創立された京都文学会で刊行したものであり, 創刊号は4月に刊行されている. 上記の「ベルグソンの哲学的方法論」が掲載されたのは第1巻第8号となっているので, 明治43年11月が正しいといえよう.

なお, 後年, ベルクソン逝去の報が伝えられたとき, 西田幾多郎は朝日新聞記者のインタビューに次のように答えている. (朝日新聞昭和16年1月7日)<sup>8)</sup>

「逝けるベルグソン」と題されたこの短文は, 全集に収録されていないようなので, 少し長いけれども, 全文を示す.

自分はベルグソンには直接会ったことはなく, たゞ著書を通じてその思想を知り得たに過ぎないが, 十九世紀の終わりから二十世紀のはじめにかけての最も偉大な哲学者と云うことが出来ると思う

リッケルト既に亡く, フッサルも十年前に他界してフランスのベルグソン一人孤高を守っていた訳だが彼の死によって最後の人を失った訳で, 巨星落つの感が深い

ベルグソンは今後の世界に生きる哲学者ではないかも知れず, また現代の哲学界にはカントやヘーゲル程には知られていなかったが, 自分は四高時代彼の所謂「直接所与」に触て大いに得るところがあり, また「純粹経験」なる考えに到達し「善の研究」を世に問うたのはベルグソンを知り得てからのことだ

彼の主著としては「意識の直接所与」「物質と記憶」「創造的進化」の三つをあげることが出来よう、其思想もこの三冊に尽きているようだ、彼の哲学は生命の創造を深く明らかにした哲学だといえよう

ベルグソンは先づ世界の實在は純粹経験であるとした、そして総ての實在は精神的なもので物質は精神の弛んだものと考えた、しかも純粹持続は創造的なもので、この観点に立って総ての生命を説明した、これを彼はエラン・ヴィタル（生命の飛躍）と名付けているが、非常に天才的な閃きを随所に見せている所が偉大な所以といえよう、文章も実に流麗でうまい

フランス哲学の伝統はベルグソンによって大成されたと云われている

以上の三冊の外一九三二年に「道德と宗教の二つの流れ」を出し、その外小さな著作は枚挙に遑がない、「笑い」の説明等は彼一流の哲学原理を応用したもので頗る興味がある

かれの哲学思想を初めて学ぶ人には「形而上学序論」を奨める、ベルグソン哲学の入門書としてはこれが一番いいだろう。（談）

以上のように、明治時代の終わり頃、西田幾多郎はベルクソンの諸作を熱心に読んでいたことが分かるが、上記した二つの論文を執筆した後、彼自身は独立したベルクソン論を書いていない。しかし、彼の『善の研究』成立にはベルクソンの所謂『時間と自由』が多大の影響を与えていたことが、このインタビューの記事から分かる。

### 3.2.2 夏目漱石とベルクソンのかわり

夏目漱石は日記、書簡、講演等でベルクソンに言及している。ただし、夏目漱石の日記は、西田幾多郎の場合と異なり、かなり断片的である。また、講演でベルクソンの名が出てくるのは、大正3年11月に東京高等工業学校の文芸の会で行われたものと、同年11月の学習院輔仁会で行われた「私の個人主義」で、そこではオイケンとベルクソンに触れている。また、『小品集』に収めら

れた「思ひ出す事など」の三でウィリアム・ジェイムズの訃報にふれ、この項の終わりに丸括弧に入れて、ベルクソンの第一著書の英訳標題 Time and Free Will（時間と自由意志）の記述が見える。

彼の日記には、

明治44年6月28日〔水〕

○昨日ベルグソンを読み出して「数」の篇に至つたら六づかしいが面白い、もつと読みたいが今日は講演の頭をと、のへる都合があつて見合わせる。（原文は正字旧仮名、以下同じ。）

明治44年7月1日〔土〕

○ベルグソンの「時間」と「空間」の論を読む。（同上）<sup>9)</sup>

また、明治43年秋頃の日記の断片とみられるところに、

1910、10月6日として、Time and Free Will の訳者ポグソンがモンブランで死んだ

というものがある。（この時期、夏目漱石は修善寺で療養していた。）

日記ではこのように簡単に触れているだけだが、彼の蔵書の余白に書かれた書き込みの中に、次の一文がある。

H. Bergson : Time and Free Will.

(Trans. by F. L. Pogson. London : Sonnennschein & Co. 1910)

〔扉に〕

文学書ノ面白イモノヲ読ンデ美シイ感ジノスルノハ珍シクナイガ哲理科学ノ書ヲ読ンデ美クシイト思フノハ殆ンドナイ。此書ハ此殆ンドナイモノ、ウチノーツデアル。第二篇ノ時間空間論ヲ読ンダ時余ハ真に美クシイ論文ダト思ツタ。

（第16巻 別冊 p.195）<sup>10)</sup>

これを読むと、漱石はベルクソンに強い共感を覚えたようである。この書き込みに関しては、平井啓之が早くから指摘していたことである。

因みに、「漱石山房蔵書目録」には、ベルクソンの著作（英訳本）が三冊収

められている。

- ・ Time and Free Will. Trans. by F. L. Pogson. London : Sonnennschein, 1910.
- ・ Creative Revolution. Trans. by A. Mitchell. London : Macmillan, 1911.
- ・ Laughter : an Essay on the Meaning of the Comic. Trans. by C. Brereton & F. Rothwell. London : Macmillan, 1911.

(同上, p. 775)<sup>11)</sup>

また、漱石全集の解説を執筆した小宮豊隆が指摘しているように、漱石は自分の蔵書にきちんと目を通していたものと思われ、彼の小説にベルクソンの影響が出ているとすれば、この三冊がその手掛かりを与えるものと思われる。<sup>12)</sup>

### 3.2.3 大正期のベルクソンの流行

明治45年7月30日に年号は大正と変わった。西暦では1912年で、この年には二つのベルクソン論文が雑誌『藝文』に掲載された。大正2年(1913年)になると最初の翻訳書が現れ、続いて大正4年(1915年)までの間に新たな翻訳書および研究書、論文が続々登場する。しかし、この華々しさはピタリと止み、ほぼ10年間新しい論文が僅かに数点現れただけである。ブームは去ったのである。この間の状況については既に引用した宮山昌治の論文にくわしい。

以下、この時期にはベルクソンに関してどのような図書が刊行され、また論文が書かれたかを追いかけてみる。

まず、翻訳であるが、大正2年から3年にかけて6点刊行されている。

最初の翻訳は錦田義富による『ベルグソンの哲学』で、大正2年警醒社書店から刊行された。これはベルクソンの「哲学入門」の翻訳で、雑誌『哲学・倫理学評論』(Revue de Métaphysique et de Morale)に掲載されたものの翻訳である。

続いて、『創造的進化』が金子馬治と桂井當之助の訳で早稲田大学出版部か

ら刊行された。訳者の序文によれば、ドイツ語訳と英語訳の本をもとに翻訳したとあるので、重訳本である。ここでは明言されていないが、因みに Gunter の書誌によれば英訳本は Arthur Mitchell によって 1911 年に、独訳本は Gertrud Kantorowicz によって 1912 年に刊行されているので、これらをもとに翻訳されたのではないかと推測する。<sup>13)</sup>

さらに、大正 3 年には『物質と記憶』（高橋里美訳）『笑いの研究』（廣瀬哲士訳）が刊行された。なお、この『笑いの研究』は、訳者の序でフランス語原文から訳した、と断っている。こうして、この時期までにベルクソンが公刊した図書は、一通り翻訳されたことになる。

解説書および研究書は大正 3 年から 4 年にかけて一斉に刊行された。

解説書では北畠吉の『ベルグソン哲学の解説及批判第一編：時間と自由意志・哲学入門』（大正 3 年 4 月）と『ベルグソン哲学の解説と批判 第二編：物質と記憶・創造的進化』（大正 3 年 12 月）があり、これはベルクソンの著作の抄訳を含む解説書である。研究書では稲毛詛風、市川虚山著『ベルグソン哲学の真髓』、三浦哲郎の『ベルグソンの哲学』、野村隈畔の『ベルグソンと現代思潮』、中澤重雄（臨川）の『ベルグソン』、伊達源一郎編『ベルグソン』といったところである。

これらの著書に概ね共通しているのはベルクソンの哲学を「生命の哲学」あるいは「直観の哲学」として好意的に受け取っている。しかし、大正 3 年の『ベルグソンと現代思潮』でベルクソンを好意的に書いていた野村隈畔（本名、野村善兵衛）は、大正 5 年に「ベルグソン哲学の迷妄」を『六合雑誌』（第 36 巻第 1 号、大正 5 年 1 月）に発表し、ベルクソンに反対する立場を表明している。

このように大正 4 年頃まではベルクソンが大いに持てはやされた感があるけれども、その後大正 13 年（1924 年）までは、僅かに宮津栄太郎の「ベルクソンの直観主義に対する私見」（『哲学雑誌』第 380 号、大正 7 年 10 月）を最後に、以後 6 年間新たな翻訳も論文も現れなかった。大正 4 年から大正 5 年にか

けてはインドのタゴールが持てはやされた。タゴールは当時日本にも来ている。例えば、東京朝日新聞では大正4年から5年にかけて、たびたび記事を載せている。当時の社会情勢を見ると、ヨーロッパでは第一次世界大戦が始まっており、ロシア革命が起き（1917年）、それを機に日本のシベリア出兵も行われる一方で、国内では米騒動が起きている。また、吉野作造を中心とした所謂大正デモクラシー思想の動きがあり、後に京都学派と呼ばれる京都哲学会が発足している。関東大震災も起こっている（1923年9月）。世の中は騒然としていた。

### 3.3 第二期：関東大震災の復興から敗戦まで

大正13年（1924年）には、廣瀬哲士訳『笑いの研究』が東京堂書店から刊行され（大正3年4月刊の改訂か？）、西谷啓治が「シェリングの絶対的観念論とベルグソンの純粹持続」を書いている。この論文は、西谷啓治著作集に収録されているが、著作集に付された「年譜」によれば、この論文は1924年2月京都帝国大学文学部に提出した卒業論文であるが、著作集では卒業論文のうち後に独立した論文と重複する部分を省いて収録している。いずれにしても、卒業論文にベルクソンの名が出てくる早い時期のものといえる。大正14年になると、これまでの翻訳書に新たに『夢の研究』（篠崎初太郎訳）が加わる。篠崎初太郎は大阪出身の詩人で、これは英訳本からの翻訳であることを「凡例」で断っている。

大正15年になると、西宮藤朝訳の『哲学入門』島為男の『ベルグソン哲学と現代教育』が刊行され、前後して吉田熊次の「ベルグソンの哲学と教育との交渉」が『哲学雑誌』に、齋藤要の「ベルグソンの哲学」が『日本法政新誌』にそれぞれ発表された。

大正の終わり頃から昭和の初めにかけて、日本の大学での哲学教育がどのようなものであったかを概観してみる。ここに、雑誌『理想』昭和49年12月号に掲載された澤瀉久敬の「わたしの恋いびとフランス哲学」という一文があ

る<sup>14)</sup> 日仏哲学会発会式でなされた記念講演である。因みに、澤瀉久敬は九鬼周造、坂田徳男等とともに日本にフランス哲学研究を根付かせた人である。

澤瀉久敬はフランス文化とフランス語にあこがれて旧制第三高等学校文科丙類（フランス語を主とするクラス）に入学し、フランス語の勉強に集中したという。大学は哲学科に進んだが、「その頃〔大正の終わり、筆者注〕は哲学といえばドイツ哲学と考えられていた…そのことは先生方が使用された演習のテキストを見ても…英語でなければドイツ語のテキストであった。」〔裏返せば、フランス語の原書が演習で読まれるということは殆どなく、フランス哲学に関する講義も全くなかった〕という。当時の『哲学雑誌』『哲学研究』といった雑誌の目次を眺めていると、この澤瀉の指摘を裏付けている。

彼が大学院に進んだ年に、九鬼周造が京都帝国大学講師として赴任した。九鬼周造全集に収められた「年譜」によれば、それは昭和4年4月であった。九鬼の最初の講義は「現代フランス哲学」であり、このことは画期的なことであったと澤瀉はいう。つまり、「京都大学において、そしておそらく日本において、フランス哲学が真正面から取り上げられたのは九鬼先生のこの御講義ではないかと思います。」と<sup>15)</sup> こうして、我が国でも本格的にフランス哲学が大学で講じられるようになった。

なお、補足すると、九鬼周造は滞欧中に二度ベルクソン本人に会い、親しく会話したことが、雑誌『理想』の昭和16年（1941年）3月号に掲載された「回想のアンリ・ベルグソン」に出ている。<sup>16)</sup>

この時期は、関東大震災から太平洋戦争の終わりまでであり、前半は関東大震災で東京を中心に多量の書物が失われた。後半は思想統制が次第に厳しくなり、印刷用紙の統制、日本出版文化協会による出版許可など、出版状況も悪化するに従って、不要不急の書物の出版は困難になって行くが、そうした中で、ベルクソンの翻訳は途絶えることなく続くと同時に、僅かながら研究書も刊行されている。

この時期には翻訳書として西宮藤朝による『哲学入門』（1926年）、廣瀬哲

士による『意識に直接与えられたもの』（1930年）、小林太市郎による『精神力』（1932年）、坂田徳男による『時間と自由』（1936年）、平山高次による『宗教・道徳の二源泉』（芝書店、1936年）、高橋里美による『物質と記憶』（岩波文庫、1936年）、服部紀による『時間と自由』（岩波文庫、1937年）、吉岡修一郎による『思想と動くもの』（1938年）、林達夫による『笑』（岩波文庫、1938年）、小面孝作による『創造的進化』（1939年、二分冊）、吉岡修一郎による『道徳と宗教』（1939年）、平山高次による『道徳と宗教の二源泉』（岩波文庫、1941年）、松浦孝作による『創造的進化』（1943年）、廣瀬哲士による『笑いの研究』（1943年）、吉岡修一郎による『創造的進化』（1944年）、五十嵐達六郎による『アリストテレスの場所論』（1944年）といったところである。

日本全体が戦争に向かって突き進んでいたこの時期、日独防共協定や日独伊三国同盟などが成立し、ドイツ哲学が主流となっていたことを考えると、ベルクソンの公刊された著作のほぼすべてがこの時期に翻訳刊行されていたことは、今になって振り返れば、稀有のここのように思われる。

一方、研究書も僅かながら刊行されていた。坂田徳男の『ベルグソン 創造の哲学』（1937年6月）、吉岡修一郎の『ベルグソンと科学的精神』（1936年1月）、安部光穂の『ベルグソン哲学』（全三冊、1941年7月～1943年8月）が刊行された。

この第二期の特徴は、ベルクソンの主著の翻訳が『創造的進化』を除いてすべて岩波文庫に収められたことであろう。岩波文庫は周知のように昭和2年（1927年）7月、ドイツのレクラム文庫に範を取り、古典的名著を廉価で一般読者に提供するために創刊された。その中に、ベルクソンの『物質と記憶』『時間と自由』『笑』『道徳と宗教の二源泉』の翻訳（岩波文庫での刊行順）が収められたことで、ベルクソンの読者が一気に拡大したと推測される。

もう一つ特記すべきことは、ベルクソンの没した1941年、即ち、昭和16年4月に、雑誌『思想』が「ベルグソン特輯」を組んだことである。今日ではそれほど珍しくないことだが、当時の市販雑誌が一号全部をベルクソン特集で埋

めるというのは画期的なことであった。さらに、同年6月には『哲学雑誌』が「ベルグソン特輯」を組んでいる。しかし、京都の雑誌『哲学研究』や昭和2年4月に創刊された雑誌『理想』では特集を組んでいない。

以上の流れに補足すれば、このような状況の中でアルベール・チボオデの『ベルグソンの哲学』（高橋廣江訳、1943年12月刊）が翻訳され、五十嵐達六郎による『アリストテレスの場所論』がラテン語原文から完訳されたことも見逃せない。前者については、本編の1943年の項（pp. 47-48）の注に示したように、上巻のみの刊行だったようで、下巻の刊行は確認できていない。

### 3.4 第三期：戦後から昭和35年まで

我が国におけるベルクソン受容史で、この第三期に当たる時期を何時までとするか迷うところである。理由は、前に引用した澤瀉の文章に「昭和二十九年大阪にフランス哲学研究会というものが作られ」た。「この会はベルクソンの生誕百年を記念して『ベルグソン研究』という論文集を一冊の単行本として出版し、また『現代フランス哲学』および『続現代フランス哲学』という二冊を公刊した」<sup>17)</sup>と書かれていることで、我が国におけるベルクソン研究に新しい動きが出てきて、その成果が会員による論文集となって公刊された年を区切りとすればいいか、あるいは、フランス本国でベルクソン生誕百年記念として彼の公刊された著作を一巻に収めた著作集がフランス大学出版部から刊行された年で区切るか、という迷いである。前者の区切りを取れば、『ベルグソン研究』が刊行されたのは昭和36年（1961年）となり、後者の区切りを取れば昭和35年（1960年）となる。あまり大きな差はないと思われるだろうが、当時10代の後半にかかっていた筆者にとっては、所謂「60年安保反対運動」の終焉を境にして、その挫折感から、当時の若者を襲った「しらけ」の風潮を忘れることが出来ない。昭和35年と昭和36年では世の中がガラッと変わった。こうした時代の変わり目を考えると、ここを区切りとするのも一つの考えであると思われるので、今は昭和35年を区切りの年とすることにした。

さて、戦争が終わってみれば、多くの書物が失われていた。その数は関東大震災の時とは比べものにならない。東京だけでなく地方都市でも度重なる空襲によって多数の書物が失われた。出版社、書店のみでなく各地の図書館も多く罹災し、蔵書を疎開させる直前に空襲で失われた記録が日本図書館協会編『近代日本図書館の歩み 地方編』の中に多数見ることができる。<sup>18)</sup>

戦後のこの時期、ベルクソンに関する文献はどのような状態にあったか。敗戦の年には、ベルクソン関係の図書も雑誌論文もなかった。昭和21年、22年には戦争中に刊行された小林太市郎訳『精神力』、吉岡修一郎訳『創造的進化』が、いちちやく地方の出版社から刊行された。昭和22年には坂田徳男訳『形而上学序説』、同23年には今井仙一の『ベルグソン』が刊行され、また、昭和22年の暮れには澤瀉久敬の『仏蘭西哲学研究』に「ベルグソンの著作」が収められ、この書は翌々年昭和25年に増補して『フランス哲学研究』として再版された。

岩波文庫からは、河野與一訳の『思想と動くもの』（三分冊）の第一冊『哲学入門／変化の知覚』が昭和27年に出版されると、翌年には平山高次訳『道德と宗教の二源泉』（昭和16年版に全面加筆訂正した）、河野訳『思想と動くもの』の第二分冊『哲学的直観他4篇』が出されている。河野訳の『思想と動くもの』の第三分冊は昭和30年に刊行されて完結したが、この訳は名訳として今日でも読み継がれている。（1998年には木田元の解説を付して、フランス語原本の通り各編を並べ替え、一冊本として新たな姿を示している。）また、真方敬道訳『創造的進化』（上、下）も昭和29年に岩波文庫に入った。

ほかに、前に刊行された今井仙一の『ベルグソン』は『ベルグソン哲学入門』と標題を変えて創元文庫の一冊となり、澤瀉久敬の『科学入門－ベルグソンの立場に立って－』が角川新書に入った。この戦後数年間は、ベルグソン研究論文は十数点書かれた（「本編」参照）だけで、まだ低調であったといえる。

昭和30年代に入ると、本格的なベルクソン研究が書かれた。淡野安太郎による『ベルグソン』（勁草書房、1958年刊。思想学説全書1）である。この書

は初版刊行以後、数回体裁を変えて復刊されており、戦後書かれたベルクソンについての名著の一つといえよう。

この時期の特筆すべきことは、小林秀雄のベルクソン論である「感想」の連載を始めたことである。何が重要かといえば、第一に文芸批評家として名声を得ていた小林秀雄によるベルクソン論であったこと、次に、この連載（56回まで、6年間）が文芸雑誌『新潮』で行われたことである。文学には関心があっても哲学や思想にそれほど関心のない者の目にもベルクソンという名に触れる機会を提供したこと、また、これまでのベルクソンについての研究論文は主に哲学関係の雑誌に掲載されてきたが、その読者と文芸誌の読者の数は比較するまでもなく後者の方が多数である。つまり、多くの一般読者にベルクソンの名を知らせることになった。因みに、この1980年代最後の年に、元号が昭和から平成に変わった。それに伴って、図書も雑誌も出版年を西暦で表示するものが多くなり、引用文献、参考文献での出版年を西暦で書くのが一般化してきた。

### 3.5 第四期：昭和36年以降

この時期の状況を見るにはいくつかの区切りを設ける必要がある。昭和36年は西暦に直すと1961年であり、それから今日まで50年の歳月が流れている。そこで、「本編」で一覧できるように、翻訳書の刊行や研究書の刊行、さらに研究論文の発生状況から、ここでは次の区切りでたどってみる。ただし、この区切りはあくまでも便宜的なものである。

- (1) 1960年代後半～1970年代
- (2) 1980年代
- (3) 1990年代
- (4) 2000年代

である。

### 3.5.1 1960年代後半から1970年代にかけて

1961年には『ベルグソン研究』が勁草書房から刊行された。これは関西を中心とした「フランス哲学研究会」のメンバーによるベルクソン研究論文集である。編集には会の中心であった澤瀉久敬と坂田徳男が当たっている。ここに収録されている諸論文はこの論文集のために執筆されたものであり、過去に発表されたものではない。この図書が刊行されたことの意義は、これまで主として大学の紀要や研究者仲間で刊行している会誌等の一種閉じられた世界で発表されていた研究論文が、一般読者を対象として登場したことである。

続いて、1965年から66年にかけて、白水社から『ベルグソン全集』（全9巻）が刊行された。この全集刊行は、フランス本国でベルクソン生誕100年記念の事業としてベルクソン著作集（全1巻）と雑纂（*Écrits et Paroles*）3巻が刊行されたのに呼応するものであり、ここに収められた翻訳は、旧来の翻訳ではなく、すべて新たに訳されたものである。当然のことながら翻訳の文体はこの時代に相応しいものとなっていた。こうしてベルクソンの多くの著作を日本語で読めるようになったことで、ベルクソンの読者は確実に増えた。

白水社の全集が刊行された後、中央公論社から『世界の名著』（全66巻）が刊行され、その第53巻にベルクソンを取めている（1969年）。ここで従来使用されてきた「ベルグソン」という表記が「ベルクソン」と変更になる。注意深い人は気付いたことであろう。その理由については、『世界の名著 第53巻 ベルクソン』に付された月報の中での澤瀉久敬と前田陽一の対談「ベルクソン 哲学の性格」で明らかにされている。この巻に収められたのは坂田徳男訳「形而上学入門」、三輪正訳「哲学的直観」他3篇と森口美都男訳「道徳と宗教の二つの源泉」で、これらは後に中公クラシックスに『ベルクソン 哲学的直観 ほか』と『ベルクソン 道徳と宗教の二つの源泉』として再刊されている。

1960年代後半のこのような新しい翻訳書の出現が、次の70年代の研究の活性化を用意したと言える。今、「本編第一部」に収録できた論文を数えてみると、1960年代10年間に発表された論文数は46点であり、1970年代になると

75点と急増する。もっとも、56回に渡って連載された小林秀雄の「感想」を1点と数えての話である。論文の執筆者も増加している。また、「本編第二部」で見るように、その後多産なベルクソン論文の執筆者となる研究者がこの時期から現れはじめる。

この時期を別の面から見ると、本格的なベルクソン研究書が続いて刊行され、フランスのベルクソン研究書も次々と翻訳刊行され、ベルクソンに関心を持つ一般読者にとっては幸運な時代になってきた。前者の例を挙げれば、中島盛夫の『ベルグソンと現代』（1968）、池辺義教の『ベルクソンの哲学』（1976）、中田光雄の『ベルクソン哲学 実存と価値』（1977）、澤瀉久敬の『ベルクソンの科学論』（1979）などであり、後者の例を挙げれば、シュヴァリエの『ベルクソンとの対話』（1969）、ドゥルーズの『ベルクソンの哲学』（1974）、セルティランジュの『アンリ・ベルクソンとともに』（1976）である。このような動きの中で、岩波文庫にこれまで収められていたベルクソンの諸作も、次々と改訳されて一般読者の手元に届けられるようになった。

### 3.5.2 1980年代

1980年代に入ると、ベルクソン関係の単行本が毎年のように刊行された。メルロ＝ポンティの『心身合一 ―マールブランシュとピランとベルクソンにおける』（1981）、森脇義明の『小林秀雄とベルクソン』（1982）、市川浩の『ベルクソン』（1983）、三宅中子の『習慣と懷疑 ―モンテーニュ、パスカル、ベルクソン』（1985）、澤瀉久敬の『アンリ・ベルクソン』（1987）、ジャンケレヴィッチの『アンリ・ベルクソン』（1988）、ドゥルーズの『差異について』（1989）である。森脇義明の『小林秀雄とベルクソン』は、小林秀雄とベルクソンの関わりを正面から取り上げた最初の単行本である。市川浩の『ベルクソン』は、講談社から刊行された『人類の知的遺産』の一冊として書かれた。わが国でこれまで書かれたベルクソン伝の中では良質のものであり、ベルクソンの主著の案内書としてもよく出来ている。この書は、1991年に講談社学術文

庫に収められて、入手しやすくなった。三宅中子のは、サブタイトルの三人の思想家についてこれまで発表してきた論文を集めたものである。

この時期訳されたベルクソン関係図書は3点ともベルクソンから強い影響を受けた現代フランス哲学界の人々の著作である。なおジャンケレヴィッチの『アンリ・ベルクソン』とドゥルーズの『差異について』は同一翻訳者による増補版が1990年代になって刊行されている。この10年間には多数の論文が発表された。1970年代の約倍に当たる125点を数える。

### 3.5.3 1990年代

この時期にも多数の単行本が刊行された。平井啓之訳『時間と自由』(1990)、これは1965年に刊行された『ベルグソン全集』第1巻に収められたものを独立させ、「イデー選書」の一冊として単行本化したものである。なお、2009年には「Uブックス」の一冊として新書判になった。いずれも白水社からの刊行である。次に、既に触れた市川浩の『ベルクソン』(1991、講談社学術文庫)、山崎行太郎の『小林秀雄とベルクソン』(1991年)、ドゥルーズの『差異について』増補新版(1992)、ヴィエイヤール＝バロンの『ベルクソン』(1993、文庫クセジュ)、佐藤光の『ボラニーとベルクソン ―世紀末の社会哲学―』(1994)、松田明の『モーツァルト・ベルクソン・枝雀 ―笑いの哲学と美学―』(1995)、中村弓子の『受肉の哲学 ―ベルクソン／クロードル／ジード』(1995)、淡野安太郎の『ベルグソン』(1996)は1958年刊行の同名書の新装版であるが、需要が多く再刊されたものである。ジャンケレヴィッチの『最初と最後のページ』(1996)は、「第一部：哲学論考」でベルクソンを扱っている。さらに、ジャンケレヴィッチの『アンリ・ベルクソン』(1997)は増補新版となっているが、1988年に翻訳刊行した折に省いた部分を補い、新たに永野拓也による「最近のベルクソン研究動向」を付したことによる。山崎行太郎の『小林秀雄とベルクソン』増補版(1997)は森脇義明とは異なる視点から小林秀雄とベルクソンの関わりを追求している。河野与一訳『思想と動くもの』(1998、

岩波文庫）は、戦後同文庫から三分冊で刊行されていたものを一冊にまとめ、収録論文を原書通りの順に戻したもの。清水誠の『ベルクソンの靈魂論』（1999）、矢次正利の『フランス哲学研究』（1999）はいずれも過去に発表した論文を集成したものであり、矢次のものはベルクソンに関する六つの論文を収めている。ただし、この矢次正利の本は非売品であるため、一般読者の目に触れる機会は少なかったものと思われる。

続いて、合田正人と谷口博史の訳で『ベルクソン講義録Ⅰ』（1999）、ドゥルーズの編集した『記憶と生 アンリ・ベルクソン著』（前田英樹訳、1999）、田島節夫訳『物質と記憶』（1999）が刊行された。『ベルクソン講義録』の翻訳は全4冊で2001年に完結した。

この10年間に発表された論文は約300篇に達する。前の10年間に発表されたものの倍以上である。

この時期の特徴はいくつか指摘することが出来る。一つは、淡野安太郎の『ベルクソン』が装いを新たにして復刊したように、過去に刊行された名著、名訳が比較的安価に入手できる形で再刊されたことである。次に、1970年代からこつこつと論文を発表してきた研究者の中で、それまで発表した論文をまとめて単行本として公刊するようになったことである。この傾向は2000年代に入ってからさらに強まってきている。彼らの論文の多くは、一般の読者の目に触れない紀要や学会誌に発表されたものであるが、このように一般読者の目にとまる形で刊行されることは、ベルクソン受容にとって歓迎すべきことである。第三に、毎号特集を組む雑誌『現代思想』が1994年9月にベルクソン特集を組んだことである。この時多くの論文、主として若手の研究者によるものが一気に増えて、その後この傾向が今日まで続いている。第四に、ベルクソン研究が哲学以外の分野に拡張されつつあることである。社会学、生物学、工学関係など他分野の研究者の論文にも出会うようになってきた。論文発表の場も、市販される雑誌は以前とそれほど変わらず少ないが、紀要類など若手研究者たちの発表の場が拡大している。

### 3.5.4 2000年代

20世紀も終わり、2000年代に入って既に10年以上経過している。ベルクソン書誌の本編を編んだときは、収録範囲を2004年までで切った。この5年間に、発表された論文数は143件あり、すでに1980年代の発表論文数を越えている。さらに、2005年から2011年7月までの約5年間に、205件の論文が発表されている。1960年代と較べてみれば大変な活況を呈しているといえる。

少し具体的に見て行く。(2004年までは本編、2005年以降は補遺編参照。)

2000年には次の図書が刊行されている。石垣優の『時間を生きる ベルクソンの時間をめぐって』、檜垣立哉の論文集『ベルクソンの哲学－生成する実在の肯定』。翻訳書は、合田正人を中心とする『ベルクソン講義録』のⅡとⅢ、ドゥルーズ『差異について』(平井啓之訳・解題、増補版)の新装版、宇波彰による新訳の『思考と運動』(レグルス文庫、上下2冊)。

2001年には、石井敏夫の論文集『ベルクソンの記憶理論－『物質と記憶』における精神と物質の存在証明－』、岩田文昭の論文集『フランス・スピリチュアリズムの宗教哲学』、翻訳は中村文郎による新訳の『時間と自由』(岩波文庫)とさきに挙げた『ベルクソン講義録』の第4巻目が刊行された。

2002年には、紺田千登史の論文集『フランス哲学と現実感覚－ボン・サンスの系譜をたどる－』と筒井文隆の論文集『ベルクソンとカントの社会学－人心覚醒から世界平和へ－』が刊行され、合田正人と平井靖史による新訳の『意識に直接与えられたものについての試論』(ちくま学芸文庫)と嘗て『世界の名著』に収められていた坂田徳男他4名によるベルクソンの小論集『ベルクソン 哲学的直観ほか』が中公クラシックスの1冊として刊行された。

2003年には、金森修の『ベルクソン 人間は過去の奴隷なのだろうか』がNHK出版から、また、伊藤淑子の論文集『ベルクソンと自我－自我論を通して生命と宇宙、道徳と宗教を問う』が刊行され、また、『世界の名著』に収められていた森口美都男訳の『道徳と宗教の二つの源泉』が中公クラシックスに上下2冊で収められた。

2004年には新しい単行本は刊行されていない。2005年には、紺田千登史の論文集『フランス哲学－そのボン・サンスの伝統と日本、アメリカ』が関西学院大学出版会から刊行され、長谷正當の論文集『心に映る無限－空のイメージ化－』が刊行された。翻訳ではカリウの『ベルクソンとバシュラール』が永野拓也の訳で刊行された。

2006年になると、守永直幹の論文集『未知なるものへの生成－ベルクソン生命哲学』、篠原資明の『ベルクソン－〈あいだ〉の哲学の視点から』（岩波新書）、杉山直樹の論文集『ベルクソン 聴診する経験論』が刊行され、さらに法政大学出版局から久米博、中田光雄、安孫子信編集の『ベルクソン読本』が刊行された。この読本はベルクソンを多面的に捉えようとする論文集であり、ベルクソン研究の動向も取り上げている。この年の新しい翻訳は、長い間邦訳が待たれていたドゥルーズの『シネマ 2 時間イメージ』が宇野邦一等の訳で法政大学出版局から刊行されている。

2007年には、戸島貴代志の論文集『創造と想起－可能的ベルクソニスム－』と若くして逝った石井敏夫の論文集（遺稿集）『ベルクソン化の極北』が刊行され、合田正人と松本力による新訳の『物質と記憶』（ちくま学芸文庫）が刊行された。

2008年は、シュヴァリエの『ベルクソンとの対話』が新装版で復刊され、ドゥルーズの『シネマ 1 運動のイメージ』が財津理と齋藤範の訳で法政大学出版局から刊行された。

2009年には、本田裕志の論文集『ベルクソン哲学における空間・延長・物質』と中村弓子の論文集『心身合一－ベルクソン哲学からキリスト教へ』が刊行され、また、平井啓之訳の『時間と自由』が白水社からUブックスの一冊として新書判の形で刊行された。

2010年の新しい動きとしては、この年の終わり近く、白水社から竹内信夫の個人訳による『新訳－ベルクソン全集』が刊行され始めたことである。年1冊の予定で、ベルクソンが公刊した順に翻訳刊行する予定である、と。

他に、合田正人と松井久による新訳の『創造的進化』（ちくま学芸文庫）及びジリボンの『不気味な笑い——フロイトとベルクソン』（原章二訳）が平凡社から刊行された。

こうして、この10年間に刊行された図書群をたどってみたわけだが、この活況は遙か昔の大正時代とは雲泥の差がある。

論文の発表に関しては、この10年間に350件あることは既に述べたが、それは2009年がベルクソン生誕150年にあたるということで、雑誌『思想』と『哲学雑誌』が特集を組んだこともあり、また、『ベルクソン読本』に多数の論文が収められたのも一因と思われる。

## 注

- 1) 宮山昌治：純粹持続の効用－大正期ベルクソニズムと戦争－ 『成城文藝』 No. 169, 2000.2. p. 2.
- 2) 早いところでは1930年5月に刊行された広瀬哲士訳『意識に直接与えられたもの』がある。附録1参照。
- 3) 『世界の名著 53 ベルクソン』（中央公論社 昭44.3.）の月報に掲載された澤瀉久敬と前田陽一の対談参照。
- 4) 宮山昌治 前掲論文 p. 2.
- 5) 西田幾多郎全集 第19巻（岩波書店 昭41.9.） p. 679.
- 6) 西田幾多郎全集 第17巻（岩波書店 昭41.5.） p. 728.
- 7) Henri Bergson : a bibliography / P. A. Y. Gunter. Rev. 2nd ed.  
Bowling Green, Ohio : Philosophy Documentation Center, Bowling Green State University, 1986. p. 21.
- 8) 東京朝日新聞縮刷版 昭和16年1月7日 p. 5.
- 9) 漱石全集 第13巻 日記及断片（岩波書店 昭41.11.） p. 645-646.
- 10) 漱石全集 第16巻 別冊（岩波書店 昭42.4.） p. 195.
- 11) 同上 p. 775.
- 12) 同上 p. 878.

この巻の解説の最後で、小宮豊隆は次のように書いている。

漱石の蔵書は…読書家としての漱石を物語るものであるという事即ち漱石は、自分で読む為に本を買い、買った本はたいい読んでいたという事だけを、言って置けば足りるだろうと思う。（原文、正字旧仮名）

- 13) P. A. Y. Gunter 編著 前掲書 p. 43; p. 44.
- 14) 澤瀉久敬：わたしの恋いびとフランス哲学 『理想』 No. 499, 昭 49. 12. pp. 79-93.
- 15) 澤瀉久敬 前掲論文 p. 83.
- 16) 九鬼周造：回想のアンリ・ベルグソン 『理想』 No. 118, 昭 16. 3. pp. 82-86.
- 17) 澤瀉久敬 前掲論文 p. 88.
- 18) 近代日本図書館の歩み 地方篇：日本図書館協会創立百年記念 日本図書館協会編・刊 1992. 3. vii, 871p.

## 第4章 終 章

これまで述べてきたことをまとめてみると以下の通りである。

本論稿で取り上げた研究方法は、これまで研究対象とされてこなかった文献目録を、研究対象となる資料と位置付け、そのような文献目録は従来の編纂方法で作成することから新たな編纂方法を導入しなければならないことを述べた。即ち、図書も論文・記事も含めた編年体の文献目録を先ず作成しなければならない。なぜなら、図書と論文・記事は同時発生的に出現するのであり、それは人間個々の一連の知的活動の結果であってそこに仕切りを設ける理由はないのである。このように考えた上でベルクソン関連の編年体文献目録を作成し、ベルクソン受容という流れを捉えることであった。

ある思想家、具体的にはベルクソンの受容史を研究しようとする場合、二つの視点が考えられる。一つは、その思想家を研究する人たちがどのように受容し、新たな思索の糧としていったか、また、その成果としてどのような論文、図書が刊行されたかをたどるものである。もう一つの視点は、社会の大部分を占める一般読者がベルクソンをどのように受容してきたかをたどるものである。一般読者はベルクソンの著作に接しても研究者のように直接その成果を示すことは、まず無い。そのため、一般読者のベルクソン受容を明らかにすることは困難である。ただ、一般読者が手軽に入手できる図書の刊行状況を見れば、その時代の一般読者の傾向がある程度推測できる。ベルクソンの受容に関

しても同様に考えられるので、大正時代以降今日までの約100年間にわが国で刊行されたベルクソンの著作の翻訳、ベルクソン研究書の翻訳および邦人によるベルクソン研究書・解説書の刊行状況を、これも編年体で並べその推移を明らかにした。その編年体で並べた図書刊行状況を、本論稿の附録1として添えた。

このように、編年体の文献目録を作成し、一般読者に向けられた図書の刊行がどのように変遷してきたかという視点から、わが国におけるベルクソン受容史を検討してきた結果、次の諸点を読み取ることが出来た。

- 1 まず、この100年間で、研究者たちの論文発表の場が非常に多くなったことである。思想関係の学術論文を掲載する市販雑誌の数は戦前と今日とでそれほど変化していない。戦後の大学の増加と各大学が紀要類を盛んに出すようになったことが、発表の場の増加につながっている。このことは研究者の増加と連動したものといえよう。

ただし、この状況は一般読者にも開放されているものとは言いがたく、謂わば閉ざされた社会での賑わいといえる。

- 2 図書については、大正時代の初めには1910年までに刊行されたベルクソンの著書は抄訳も含めて、ほぼすべてが翻訳された。しかし、大正初期は独訳本、英訳本からの重訳が主であったが、中にはフランス語から訳したものも現れた。

昭和10年代には、ベルクソンの四つの主著はすべて翻訳され、また、昭和2年に創刊された岩波文庫にはこの10年代の終わりまでに『物質と記憶』『時間と自由』『笑』『道徳と宗教の二源泉』が収められ、一般読者が手にしやすくなった。

- 3 本格的なベルクソン研究が現れるのは昭和10年代の後半になってからである。
- 4 戦後の画期的なことといえば、昭和36年に刊行された『ベルクソン研究』の出現と白水社から『ベルクソン全集』全9巻が刊行された(1960～

1961年) ことである。

前者は、わが国で始めて刊行された書き下ろしの論文集で、多数の若手研究者が論文を寄せている。後者は、これまで単行本や文庫本では読めなかったベルクソンの著作が収録されていて、一般読者の手が届くところにベルクソンが近づいたといえる。

5 戦後の論文数の増加や単行書の刊行が盛んになる有様は第3章で述べた。大体10年単位で、論文数は倍増する傾向にあった。最近の傾向は、過去に発表した論文を集めて単行本として刊行することである。この傾向は1980年代から始まっている。

6 編年体の文献目録を作成した過程で、特に、著者索引を作成した折に、論文を沢山書いている研究者が何人かいることが分かってきた。大体1980年代から論文を書き始めた人たちで、このあたりで研究者の世代交代が始まったものと推測される。

以上、本論稿で用いた研究方法、研究内容、研究の成果について簡単にまとめた。

今後に残された課題等についても述べなければならない。「文献目録＝知の見取図」という立場に立つと、第1章で紹介した棚橋光男の指摘するような、ある時代を輪切りにしてその時代の「知的生産の〈場〉」を明らかにして行く作業がある。これは大変な時間と労力を要する作業である。

次に、明治以来多くの知的巨人といわれる人が出現したが、彼らの知的生産を支えた基盤がどのように形成されたかを窺わせる文献目録の実現が期待される。その時どのような方法を考案するか、対象に即した方法を考案しなければならない。

以上のような課題が残されている。今回の「試論」で試みたのはそのような作業の試みの一つであった。

## 結 び

一般に書誌といい、また、文献目録といわれるものは、これまで「文献を探すための道具」と考えられてきた。即ち、文献の存在、所在を確認し、求める文献が入手できれば、その文献目録の役割はそれで終わるわけである。

しかし、文献目録はそれだけのものであろうか。文献目録には他の機能があるのではないかと考えていた折に棚橋光男の『後白河法皇』に出会い、そこで述べられている「知的生産の〈場〉」を示す目録の話に感銘した。このような発想は、残念ながら長年図書館で働いてきた者には生まれなかった。われわれは「知的生産の〈場〉」をこれまでどのように捉えていたのか。日頃、誰よりも資料に接しているはずの図書館員こそ「知的生産の〈場〉」を示すような文献目録を用意しなければならず、それを日常の仕事の一つとして遂行することが、社会に対する貢献ではないかと考えるようになった。

ベルクソンに関する国内文献を集めて、不完全ながら『ベルクソン書誌——日本における研究の展開』として、数年前に世に問うた。次いで、2011年までの文献収集の成果を『ベルクソン書誌—日本における研究の展開 補遺編』としてこのたび刊行するに至った。その作業過程でベルクソンが日本に受容されてきた経緯を概観したいと思っていた。

今回は「受容史」研究のための文献目録について検討し、「知の見取図」を示す文献目録はどうあればいいか、という観点でまとめた。これを少し敷衍すると、われわれ一人一人の「知的活動の基盤」を示すような文献目録を考えることができるのではないだろうか。具体的には、例えば、明治以来の知の巨人といわれる人たち（鷗外、露伴など）の知的基盤は何であり、どのように形成されてきたか、というものである。これは、彼らの作業場、楽屋裏を覗くことである。残された著作や全集の中から、そうした基盤を形成していると思われる文献を探り出し、文献目録を作り上げることで、新たな研究の視野が開けるものと期待できる。しかし、これは根気と時間のかかる作業となるだろう。

う。今は、そのような試みが今後行われることを期待して、結びとする。

最後になったが、上記の『ベルクソン書誌——日本における研究の展開』が刊行された折に同書を目にされ、雑誌『図書館界』で書評して下さった大阪市立大学の北克一先生（現、同大学名誉教授）にまずお礼を述べなければならぬ。本論稿をとにかくも仕上げる事が出来たのは北先生の励ましがあったからである。

さらに、松山大学の増野仁先生、石川正一郎先生にもお礼を述べなければならぬ。両先生は、筆者の草稿に目を通して下さったばかりでなく、折にふれてさまざまな示唆を与えて下さった。また、私事にわたることではあるが、『ベルクソン書誌』の刊行後、間もなく他界した兄にもこの場を借りて、曲がりなりにも「受容史試論」をまとめた報告をしておきたい。兄がこつこつと収集していた国内外のベルクソンに関する多数の文献がなかったなら、『ベルクソン書誌』もこの「試論」も生まれることはなかった。

（2013年12月 寒さが厳しくなる日に）

#### 附録1 わが国におけるベルクソンの著作の翻訳および研究書等の刊行年表 1913～2013

1. 大正時代から今日までに刊行されたベルクソンの著作の翻訳、解説・入門書、研究書、論文集を刊行年順に排列した。
2. ここに掲載したものはすべて実物を確認したものである。

1913年（大正2年）

ベルグソンの哲学 アンリイ・ベルグソン著 錦田義富訳 東京：警醒社書店

大2.4. 6, 14, 3, 208, 8p. 肖像 19cm.

＊「上 直観の哲学」は雑誌 *Revue de métaphysique et de morale* に掲載された *Introduction a la métaphysique* の訳。「下 流動の哲学」はオックスフォード大学での講演 *La perception du changement* の抄訳である。

創造的進化 アンリ、ベルグソン原著 金子馬治、桂井当之助訳

東京：早稲田大学出版部 大2.10. 3, 3, 647p. 肖像 23cm. （現代哲学 第1編）

＊本書は「直に原文に頼らずして、主として英訳と独訳とに頼らざるを得なかった」と訳者の序にある通り、重訳である。

1914年（大正3年）

物質と記憶 ベルグソン著 高橋里美訳 東京：星文館 大3.2.

7, 18, 5, 4, 475p. 23cm.

\* *Matière et mémoire* の翻訳

\*「凡例」には、「この訳は主として独英両訳によったものである。然し、両訳を対照して字句の一致しない箇所は、更に原文に当って取捨を決した。」とあることから、基本的には重訳本である。

\* 西田幾多郎の「序文」は、西田幾多郎全集 第1巻 東京：岩波書店 昭40.2. のpp. 423-426. に収録されている。

ベルグソン哲学の真髓 稲毛詛風, 市川虚山著 東京：大同館書店 大3.4.

2, 7, 2, 466p. 20cm.

ベルグソン哲学の解説及批判 第一編：時間と自由意志・哲学入門 北 吟吉著

東京：南北社 大3.4. 9, 22, 241p. 19cm.

ベルグソンの哲学 三浦哲郎述 東京：赤城正蔵 大3.4. 100p. 16cm.

（アカギ叢書 第7編）

笑の研究 ベルグソン著 広瀬哲士訳 東京：慶応義塾出版局 大3.4.

4, 1, 258p. 19cm.

\* 本書は *Le Rire* の仏蘭西語の原文より訳した。

ベルグソンと現代思潮 野村隈畔著 東京：大同館 大3.5.

13, 4, 315, 63p. 肖像, 図 23cm.

オイケンとベルグソンの哲学 ハーマン著 山崎寿春, 下野哲四郎訳

東京：春畝堂 大3.6. [10]6, 288p. 20cm.

\* 凡例によれば、Eucken and Bergson their significance for Christian thought の翻訳の翻訳であるが、「後編の「基督教神学と近代哲学的思想」は少しく基督教の気分が含まれて居るので省くこととした。」とあるので、抄訳と見なせる。

オイッケン, ベルグソン哲学講話 稲毛詛風述 東京：文学普及会 大3.7.

110, 160p. 19cm. （早稲田文学社文学普及会講話叢書 第3編）

\* 本書の前半（110p.）は五十嵐力述『謡曲文学講話』である。

ベルグソン 中沢重雄著 東京：実業之日本社 大3.10. 6, 2, 356p.

肖像 20cm. （近代文豪評伝）

\* 奥付の記載は「中沢重雄」、背の表示は「中沢臨川」となっている。

ベルグソン哲学の解説及批判 第二編：物質と記憶・創造的進化 北 吟吉著

東京：南北社 大3.12. 2, 364p. 19cm.

\*「序」の中で、「『創造的進化』の解説には、事情の為自ら筆を執ることが出来ず、学友伊藤輔利君の手を煩はした。」と断っている。

1915 年（大正 4 年）

ベルグソン 伊達源一郎編 東京：民友社 大 4. 8. 4, 4, 24, 379p.

肖像 19cm.（現代叢書 第 10 冊）

1924 年（大正 13 年）

笑いの哲学 アンリ・ベルグソン著 広瀬哲士訳 東京：東京堂書店 大 13. 9.

9, 247p. 19cm.

\*新訳版が昭和 18. 6. に刊行されている。さらに昭和 21. 6. に、同一版が再刊されている。

1925 年（大正 14 年）

時間と自由意志 ベルグソン著 北 吟吉訳述 新潮社 大 14. 2. 2, 244p.

20cm.（社会哲学新学説大系 3）

夢の研究 ベルグソン著 篠崎初太郎訳 大阪：異端社 大 14. 3. 70p.

15cm.

\*「凡例」によれば、翻訳に用いたのはスロッソンによる英訳本（Dreams. Tr. with Introd. by Edwin Emery Slosson. New York: B. W. Huebsch, 1914.）の第二版である。

\*凡例の終わりには「大正 13 年師走 9 日夜」とあり、最終ページには「1924. 4. 6. 午前三時稿を了る」とある。

1926 年（大正 15 年／昭和元年）

哲学入門 ベルグソン著 西宮藤朝訳 東京：平凡社 大 15. 3. 8, 302p.

肖像 23cm.（仏蘭西哲学叢書 第 1 編）

\*「例言」によれば、第一編は英訳本からの重訳、第二編と第三編は論文集精神の力』*L'énergie spirituelle* から訳者が選んで翻訳したものである。

また、「序文」や「例言」に断りはないが、第四編は訳者の論文である。

ベルグソン哲学と現代教育 島 為男著 東京：大同館 大 15. 7. 5, 8, 281p.

20cm.

1930 年（昭和 5 年）

意識に直接与へられたもの アンリ・ベルグソン原著 広瀬哲士訳 東京：春秋社

昭 5. 10. 174p. 肖像 20cm.（世界大思想全集 第 36 卷）

\*本書には『憂愁の哲理』（キルケゴール）『意識に直接与へられたもの』（ベルグソン）『社会に就ての新見解』（オーエン）の三著作が収められているが、全体の目次はなく、また、それぞれの著作は独立した頁付けとなっている。

1932 年（昭和 7 年）

ベルグソンの哲学 アンリ・ベルグソン著 錦田義富訳 改訂版

京都：永沢金港堂 昭 7. 8. 13, 4, 175p. 19cm.

\*本書は大正 2 年 4 月刊行の改訂版（大正 10 年刊行か？）を元にしたものと思わ

れるが、言及はない。

\*「凡例」によれば、「附録ギョーの道德論は、元と明治四十五年二月京都帝国大学文科大学内哲学倫理研究大会に於いての講演の大意」に多少の修補削除を加えたもの、である。

\*「改版に際して」によれば、「終りに旧版を公にするに際して序文を給はつた桑木博士」等に対する謝辞が記されているが、本書には桑木博士の序文は収録されていない。

精神力 ベルグソン著 小林太市郎訳 東京：第一書房 昭7.10. 255p.  
21cm.

1936年（昭和11年）

ベルグソンと科学的精神 吉岡修一郎著 東京：野田書店 昭11.1.  
6.4, 317p. 23cm.

夢と哲学 ベルグソン著 広瀬哲士訳 東京：東京堂 昭11.4. 6, 249p.  
肖像 19cm.

時間と自由 ベルグソン著 坂田徳男訳 東京：日本評論社 昭11.6.  
3, 2, 204p. 23cm.

道德・宗教の二源泉 ベルグソン著 平山高次訳 東京：芝書店 昭和11.6  
iii, 399p. 肖像 23cm.

物質と記憶 ベルグソン著 高橋里美訳 東京：岩波書店 昭11.12. 322p.  
16cm.（岩波文庫）

\*大正3年2月、東京の星文館から刊行されたものの改訂版である。（訳者の序、より。）

1937年（昭和12年）

ベルグソン 創造の哲学 坂田徳男著 東京：河出書房 昭12.6. 5, 270p.  
肖像 20cm.

時間と自由 ベルグソン著 服部 紀訳 東京：岩波書店 1937.7. 254p.  
16cm.（岩波文庫）

1938年（昭和13年）

思想と動くもの ベルグソン著 吉岡修一郎訳 第一書房 昭13.3. 356p.  
20cm.

笑 ベルグソン著 林 達夫訳 東京：岩波書店 1938.2. 211p. 16cm.  
（岩波文庫 1612-1613）

\*1976.11.に改訂版を刊行。

1939年（昭和14年）

創造的進化 上 ベルグソン著 小面孝作訳 東京：三笠書房 昭14.6.  
217p. 肖像 20cm.（現代思想全書 12）

創造的進化 下 ベルクソン著 小面孝作訳 東京：三笠書房 昭 14. 8.  
2, 2, 270p. 20cm. (現代思想全書 12)

道徳と宗教 ベルクソン著 吉岡修一郎訳 東京：第一書房 昭 14. 9. 419p.  
20cm.

\*奥付に「初刷一千五百部」「満州・朝鮮・台湾・樺太等の外地定価一円九十八銭」の記載がある。

1940 年 (昭和 15 年)

ベルクソンと科学的精神 吉岡修一郎著 東京：第一書房 昭 15. 8.  
6, 3, 2, 317p. 19cm.

\*奥付には「初刷 2000 部」「満州・朝鮮・台湾・樺太等の外地定価一円六十五銭」とある。

1941 年 (昭和 16 年)

道徳と宗教の二源泉 ベルクソン著 平山高次訳 東京：岩波書店 昭 16. 1.  
408p. 16cm. (岩波文庫)

\*訳者の序に「本訳書は、もと訳者が昭和十一年芝書店から出版せるものを、全文に亘って、訂正加筆したものである」と。

\*1953. 1. に正字・新かなづかい版を刊行. 401p.

\*1977. 3. に一冊本として改訳刊行. 390p.

ベルクソン哲学 安部光槌著 東京：建設社 昭 16. 7. 350p. 肖像 20cm.

1942 年 (昭和 17 年)

ベルクソン哲学 安部光槌著 中 東京：建設社 昭 17. 5. 404p. 19cm.

1943 年 (昭和 18 年)

創造的進化 ベルクソン著 松浦孝作訳 東京：三笠書房 昭 18. 2. 3, 400p.  
22cm.

\*「あとがき」に、「三年まへに「現代思想全書」の一冊として上下二巻に分かれて公刊されたものに、新しく筆を加へて一卷にまとめたもの」とあり、これは昭和 14 年 8 月に三笠書房から刊行されたものを指していると思われる。

\*「現代思想全書」収録のものは翻訳者名が「小面孝作」となっている。上記の「あとがき」にはこのことについての言及はない。

笑いの哲学 ベルクソン著 広瀬哲士訳 東京：東京堂 昭 18. 6. 9, 234p.  
19cm.

\*「序」から、本書は大正 13 年に刊行されたものの新訳版であることが分かる。また、昭和 21 年に再版されている。

ベルクソン哲学 安部光槌著 下 東京：建設社 昭 18. 8 476p. 肖像 19cm.

ベルクソンの哲学 アルベール・チボオデ著 高橋廣江訳 東京：三田文学 出版部  
昭 18. 12. 424p. 22cm.

- \*p. 424 に「上巻終り」と印刷されている。背、標題紙、奥付にはこの記載無し。  
また、訳者の序跋はない。

1944 年（昭和 19 年）

創造的進化 ベルグソン著 吉岡修一郎訳 東京：第一書房 昭 19. 1. 465p.  
19cm.

- \*奥付には「出版会承認 い 380084 号」「一千五百部」の記載があり、また、定価  
のほかに「特別行為税相当額 十五銭」の記載もある。

アリストテレスの場所論 ベルグソン著 五十嵐達六郎訳 東京：伊藤書店  
1944. 3. 1, 2, 144p. 図 22cm. (翻訳学術論叢 2)

- \*本書はラテン語原文の完訳である。  
\*「跋」の日付は「昭和十八年九月三十日」となっている。

1946 年（昭和 21 年）

精神力 ベルグソン著 小林太市郎訳 大阪：全国書房 昭 21. 6.  
255p. 肖像 22cm.

- \*本書は、昭和 7 年 10 月第一書房から刊行されたものと同一の版下を使用したも  
のと思われる。そのため、目次等の内容の記述は省略した。

創造的進化 上 ベルグソン著 吉岡修一郎訳 金沢：東邦物産株式会  
社文化部 発売：東邦書林 昭 21. 11. 274p. 20cm.

- \*本書は『創造的進化』の前半を収めたもので、翌年刊行の後半部分が「続編」と  
表示されていることから、これは「正編」あるいは「前編」の表示が欠落したも  
のと思われる。

1947 年（昭和 22 年）

創造的進化 続編 ベルグソン著 吉岡修一郎訳 金沢：東邦物産株式会  
社文化部 発売：東邦書林 昭和 22. 3. 272p. 18cm.

- \*「訳者の言葉」「凡例」および「序言」は、正編（？）に当たる前年刊行のものと  
同一である。  
\*なお、この『創造的進化』[正編] 続編は同訳者が昭和 19 年 1 月に第一書房から  
刊行したものの「訳者の言葉」および「凡例」に加筆修正したのみで、本文はそ  
のままで分冊刊行したものと推測される。

形而上学序説 アンリ・ベルグソン著 坂田徳男訳 みすず書房 昭 22. 1.  
117p. 20cm.

仏蘭西哲学研究 澤瀉久敬著 東京：創元社 昭 22. 12. 2, 364p. 22cm.

1948 年（昭和 23 年）

ベルクソン 今井仙一著 東京：弘文堂 昭 23. 12. 174p. 19cm.

- \*使用したのは、昭和 24 年 7 月刊行の再版（＝第二刷）であり、奥付には「地方  
売価百参拾七円」の記載がある。

1950 年（昭和 25 年）

フランス哲学研究 澤瀉久敬著 東京：勁草書房 1950. 9. 318p. 22cm.

＊本書は、昭和 22 年 12 月に創元社から刊行された図書の再版である。ただし、本書は単なる再版ではなく、収録論文の順序が異なると同時に、「デカルトの著作」「哲学と個性」の二篇が追加されている。

1952 年（昭和 27 年）

哲学入門／変化の知覚 - 思想と動くものⅠ - ベルグソン著 河野与一訳

東京：岩波書店 1952. 2. 102p. 15cm. (岩波文庫)

1953 年（昭和 28 年）

道徳と宗教の二源泉 ベルグソン著 平山高次訳 東京：岩波書店 1953. 1.

401p. 15cm. (岩波文庫)

＊訳者の序に「本訳書は、もと訳者が昭和十六年本文庫から出版したものを、全文に亘って訂正加筆したものである」と。

＊「臨時定価百六拾円」の表示。星印（★）一個四拾円。

哲学的直観 他 4 篇 - 思想と動くものⅡ - ベルグソン著 河野与一訳

東京：岩波書店 1953. 2. 138p. 15cm. (岩波文庫)

ベルグソン哲学入門 今井仙一著 大阪：創元社 1953. 4. 139p. 図版 15cm.

(創元文庫 D76)

＊本書は昭和 23 年 12 月弘文堂から刊行された『ベルグソン』の文庫版であり、新たに「文庫版への序」および「解説」がつけられた。

1954 年（昭和 29 年）

形而上学序説 アンリ・ベルグソン著 坂田徳男訳 東京：みすず書房 昭 29. 4.

138p. 19cm.

創造的進化 ベルグソン著 真方敬道訳 上 東京：岩波書店 昭 29. 6.

231p. 15cm. (岩波文庫)

ベルグソン 松浦孝作、榊田啓三郎訳 東京：河出書房 昭 29. 9. 330p.

肖像 19cm. (世界大思想全集 哲学・文芸思想篇 16)

1955 年（昭和 30 年）

哲学の方法 - 思想と動くものⅢ - ベルグソン著 河野与一訳 東京：岩波書店

1955. 3. 112p. 15cm. (岩波文庫)

＊1998. 9. に、1952-1955 にかけて三冊で刊行されたものを、原書本来の形に再編して一冊本とし『思想と動くもの』の標題で刊行。

時間と自由 ベルグソン著 竹内芳郎訳 東京：河出書房 昭 30. 3. 225p.

肖像 15cm. (河出文庫 2005B)

科学入門 - ベルグソンの立場に立って - 澤瀉久敬著 東京：角川書店

昭 30. 10. 164p. 18cm. (角川新書 64)

1958年（昭和33年）

ベルグソン 淡野安太郎著 東京：勁草書房 1958.5. iv, ii, 241, 17p.  
肖像 18cm.（思想学説全書 1）

1961年（昭和36年）

ベルグソン研究 坂田徳男、澤瀉久敬編 東京：勁草書房 1961.1. 378p.  
肖像 22cm.

創造的進化 ベルグソン著真方敬道訳 下 東京：岩波書店 昭36.7.  
256p. 15cm.（岩波文庫）

\*上, 下を合わせて 1979.7. に一冊本として刊行. 458p.

1965年（昭和40年）

ベルグソン全集 1 東京：白水社 1965.5. 342p. 肖像 20cm.

1：時間と自由 -意識に直接与えられているものについての試論-／アリストテレスの場所論

目次 pp. 3-7.

時間と自由 -意識に直接与えられているものについての試論-（平井啓之訳）  
pp. 13-218.

アリストテレスの場所論（村治能就，広川洋一共訳） pp. 219-295.

ベルグソン全集 5 東京：白水社 1965.6. 253p. 20cm.

5：精神のエネルギー（渡辺 秀訳）

ベルグソン全集 6 東京：白水社 1965.7. 390p. 20cm.

6：道徳と宗教の二源泉（中村雄二郎訳）

ベルグソン全集 2 東京：白水社 1965.8. 301, xiip. 20cm.

2：物質と記憶（田島節夫訳）

ベルグソン全集 7 東京：白水社 1965.9. 328p. 20cm.

7：思想と動くもの（矢内原伊作訳）

ベルグソン全集 3 東京：白水社 1965.10. 413p. 20cm.

3：笑い－おかしさの意味についての試論（鈴木力衛，仲沢紀雄共訳）／持続と同時性 -アインシュタインの理論について（花田圭介，加藤精司共訳）

目次

笑い－おかしさの意味についての試論（鈴木力衛，仲沢紀雄共訳）

pp. 11-152.

持続と同時性 -アインシュタインの理論について（花田圭介，加藤精司共訳）

pp. 155-382.

ベルグソン全集 9 東京：白水社 1965.11. 317p. 20cm.

9：小論集 II（松浪信三郎編 掛下栄一郎，富永 厚，秋枝茂夫共訳）

1966 年（昭和 41 年）

時間と自由—意識に直接あたえられたもの— ベルクソン著 中村雄二郎訳

東京：河出書房新社 1966. 1. pp. 19-137. pp. 400-402.

（世界の思想 23 現代フランス思想 415p. 肖像 20cm.）.

\*本書は『世界の思想 23 現代フランスの思想』（河出書房新社 昭 41. 1. 刊）の pp. 19-137. に収録されているものである。因みに、この巻にはアランの『散文について』（桑原武夫訳）『宗教について』（松浪信三郎訳）およびマルロオの『芸術論』（小松清訳）が収録されている。

ベルグソン全集 8 東京：白水社 1966. 2. 383p. 20cm.

8：小論集 I（花田圭介編 花田圭介、加藤精司共訳）

ベルグソン全集 4 東京：白水社 1966. 3 434p. 20cm.

4：創造的進化（松浪信三郎、高橋允昭共訳）

1968 年（昭和 43 年）

ベルグソンと現代 中島盛夫著 東京：塙書房 1968. 6. 209p. 18cm.

（塙新書 18）

1969 年（昭和 44 年）

世界の名著 53 ベルクソン 責任編集 澤瀉久敬 東京：中央公論社

昭 44. 3. 554p. 肖像, 図, 地図 19cm.

目次

ベルクソン哲学の素描（澤瀉久敬） pp. 5-60.

形而上学入門（坂田徳男訳） pp. 61-108.

哲学的直観（三輪 正訳） pp. 109-132.

意識と生命（池辺義教訳） pp. 133-163.

心と身体（飯田照明訳） pp. 165-194.

脳と思考（池長 澄訳） pp. 195-214.

道徳と宗教の二つの源泉（森口美都男訳） pp. 215-539.

ベルクソンとの対話 ジャック・シュヴァリエ著 仲沢紀雄訳 東京：みすず書房

1969. 4. 352p. 肖像 20cm.

1974 年（昭和 49 年）

ベルグソン 淡野安太郎著 改装版 東京：勁草書房 1974. 3. iv, ii, 241, 17p.

肖像 19cm.（思想学説全書）

\*緒言の年月日、目次、頁付などすべて 1958 年刊行のものと同一。但し、叢書番号は付されていない。

ベルクソンの哲学 ジル・ドゥルーズ著 宇波 彰訳 法政大学出版局 1974. 6.

136p. 20cm.（叢書ユニベルシタス 54）

1975年(昭和50年)

フランスの哲学2 生命を探る 澤瀉久敬編 東京：東京大学出版会 1975. 10.  
v, 229p. 21cm.

## 目次

ベルクソンと単純性 序に代えて 澤瀉久敬 pp. i-v.

目次 2p. (頁付けなし)

ベルクソンと生きられる空間 清水 誠 pp. 3-25.

知覚と持続 ベルクソンの『物質と記憶』についての一考察 山形頼洋  
pp. 27-49.

ベルクソンと進化論 坂本 博 pp. 51-73.

ベルクソンの形而上学 紺田千登史 pp. 75-96.

ベルクソンにおける科学と哲学 実証的形而上学のアンビヴァランス  
笹田利光 pp. 97-120.

開かれた社会,あるいは聖者の祭典 岩津洋二 pp. 121-142.

ベルクソン宗教思想の一側面 池田士郎 pp. 143-166.

ベルクソン哲学の個について 岡田松夫 pp. 167-204.

言語と直証 メーン・ド・ビランの言語論をめぐる 池長 澄  
pp. 205-226.

あとがき 澤瀉久敬 pp. 227-229.

1976年(昭和51年)

ベルクソンの哲学 池辺義教著 東京：第三文明社 1976. 1. 180p. 18cm.  
(レグルス文庫 53)

アンリ・ベルクソンとともに アントワヌ・ダルマス・セルティランジュ著  
三嶋唯義訳・解説 京都：行路社 1976. 9. 73p. 肖像 23cm.

笑い ベルクソン著 林 達夫訳 改訳版 東京：岩波書店 1976. 11. 225p.  
15cm. (岩波文庫 青 645-3)

\*本書は、昭和11年同文庫から刊行したものの改訳版である。

1977年(昭和52年)

道徳と宗教の二源泉 ベルクソン著 平山高次訳 東京：岩波書店 1977. 3.  
390p. 15cm. (岩波文庫 青 645-7)

\*1953年1月、同文庫刊の改訳版である。(訳者の序、より)

ベルクソン哲学 実存と価値 中田光雄著 東京：東京大学出版会 1977. 3.  
xxvi, 554, 10p. 22cm.

1978年(昭和53年)

道徳と宗教の二源泉 H. ベルクソン著 中村雄二郎訳 東京：白水社 1978. 10.  
388p. 20cm.

\*ベルグソン全集 6 (1965. 7. 刊) の新装版.

1979 年 (昭和 54 年)

ベルクソンの科学論 澤瀉久敬著 東京: 中央公論社 昭 54. 2. 183p. 15cm.  
(中公文庫 M88)

創造的進化 ベルクソン著 真方敬道訳 東京: 岩波書店 1979. 7. 458p.  
15cm. (岩波文庫 青 645-1)

\*本書は、標題紙、奥付等に明記されていないが、昭和 29 年 6 月 (上)、昭和 36 年 7 月 (下) の二分冊で岩波文庫に収められたものの改訳版で、一冊にまとめられたものである。

1981 年 (昭和 56 年)

心身合一 マールブランシュとピランとベルクソンにおける  
M. メルロ＝ポンティ著 滝浦静雄, 中村文郎, 砂原陽一訳 東京: 朝日出版  
1981. 11. 179p. 20cm.

1982 年 (昭和 57 年)

小林秀雄とベルクソン 森脇義明著 東京: JCA 出版 昭 57. 5. 200p. 22cm.

1983 年 (昭和 58 年)

ベルクソン 市川浩著 東京: 講談社 昭 58. 5. 11, 337, 9p. 肖像 18cm.  
(人類の知的遺産 第 59 卷)

1985 年 (昭和 60 年)

習慣と懷疑 モンテーニュ, パスカル, ベルクソン 三宅中子著 東京: 南窓社  
1985. 3. 180p. 22cm.

1987 年 (昭和 62 年)

アンリ・ベルクソン 澤瀉久敬著 中央公論社 昭 62. 6. (1987. 6.) 223p.  
15cm. (中公文庫 M88-2)

1988 年 (昭和 63 年)

漂流思考 篠原資明著 東京: 弘文堂 昭 62. 3. 245p. 20cm.

アンリ・ベルクソン V. ジャンケレヴィッチ著 阿部一智, 桑田禮彰訳  
東京: 新評論 1988. 6. 408p. 22cm.

\*原書 (1959 年, P. U. F. から刊行) に収録されている「附論」(論文 2 篇) と簡単な「ベルクソン研究書誌」は訳出されていない。

1989 年 (昭和 64 年/平成元年)

差異について ジル・ドゥルーズ著 平井啓之訳・解説 東京: 青土社 1989. 7.  
169p. 20cm.

1990 年 (平成 2 年)

時間と自由 ベルクソン著 平井啓之訳 白水社 1990. 12. 237, iiip. 20cm.  
(イデー選書)

## 1991年(平成3年)

小林秀雄とベルクソン 山崎行太郎著 東京：彩流社 1991.1. 220p. 20cm.  
 笑い 林 達夫訳 岩波書店 1991.1. 225p. 20cm. (ワイド版岩波文庫 13)

\*本書は、1976年同文庫から刊行されたものと内容は同じである。

ベルクソン 市川 浩著 東京：講談社 1991.5. 429p. 肖像 15cm.  
 (講談社学術文庫 971)

\*本書は1983年5月『人類の知的遺産 59』として講談社から刊行されたものの  
 文庫版であり、新たに「学術文庫版あとがき」が添えられている。

## 1992年(平成4年)

精神のエネルギー ベルクソン著 宇波 彰訳 東京：第三文明社 1992.4.  
 260p. 18cm. (レグルス文庫 199)

差異について ジル・ドゥルーズ著 平井啓之訳・解題 増補新版 東京：青土社  
 1992.9. 205p. 20cm.

\*1989年7月に青土社から刊行されたものに「ベルクソン 一八五九～一九四一  
 」および「訳者解説」を付加したものである。

## 1993年(平成5年)

ベルクソン J.-L. ヴィエイヤール＝バロン著 上村 博訳 東京：白水社 1993.5.  
 150, iip. 19cm. (文庫クセジュ 742)

## 1994年(平成6年)

ボラニーとベルクソン 一世紀末の社会哲学一 佐藤 光著  
 京都：ミネルヴァ書房 1994.5. x, 285, 13p. 22cm. (人文・社会科学叢書 1)

## 1995年(平成7年)

モーツァルト・ベルグソン・枝雀 一笑い哲学と美学一 松田明著  
 東京：近代文藝社 1995.5. 183p. 20cm.

物質と記憶 一精神と身体の関係について一 アンリ・ベルクソン著 岡部聡夫訳  
 東京：駿河台出版社 1995.7. v, 363, [4]p. 19cm.

受肉の詩学 一ベルクソン／クロード／ジード 中村弓子著 みすず書房  
 1995.12. v, 328, xxxviii p. 20cm.

## 1996年(平成8年)

ベルグソン 淡野安太郎著 新装版 勁草書房 1996.1. vi, 241, 17p.  
 肖像 20cm.

\*装幀が変わっただけで、1958年刊行のものと同じ。目次詳細は省略。

最初と最後のページ ウラジーミル・ジャンケレヴィッチ著 合田正人訳  
 東京：みすず書房 1996.6. vii, 499, xxip. 22cm.

## 1997年(平成9年)

アンリ・ベルクソン V. ジャンケレヴィッチ著 阿部一智、桑田禮彰訳 増補新版

新評論 1997. 1. 482p. 23cm.

＊「第二版への訳者あとがき」によれば、増補新版とした理由は次の二点である。

1) 1988 年翻訳刊行時点で除外された二論文を新たに訳出して「増補新版」とした。

2) 新たに永野拓也の「付論 - 最近のベルクソン研究動向」を加えた。

小林秀雄とベルクソン 山崎行太郎著 増補版 東京：彩流社 1997. 11.  
251p. 20cm.

1998 年（平成 10 年）

漂流思考 篠原資明著 東京：講談社 1998. 6. 290p. 15cm.  
（講談社学術文庫 1333）。

＊原本は、弘文堂 昭 62. 3. 刊 245p. 20cm.

思想と動くもの ベルクソン著 河野与一訳 東京：岩波書店 1998. 9. 435p.  
15cm. （岩波文庫 青 645-4）

＊1952-1955 に 3 冊で刊行されたものを、原書本来の形に再編して 1 冊本として刊行した。（「解説」より。）

1999 年（平成 11 年）

ベルクソンの靈魂論 清水 誠著 創文社 1999. 2. x, 300, 7p. 22cm.

フランス哲学研究 矢次正利著 高槻：大阪医科大学哲学教室 1999. 3.  
748p. 22cm. （非売品）

＊著者が 1966 年から 1996 年までに発表した論文を収録。ベルクソンに直接関連した論文が六つ収録されている。

ベルクソン講義録 I 合田正人、谷口博史訳 東京：法政大学出版局 1999. 4.  
xxxii, 461, 3p. 22cm.

記憶と生 アンリ・ベルクソン著 ジル・ドゥルーズ編 前田英樹訳 東京：未知谷  
1999. 8. 283p. 20cm.

物質と記憶 アンリ・ベルグソン著 田島節夫訳 東京：白水社 1999. 10.  
301, xiip. 20cm.

＊本書は 1965 年に『ベルグソン全集』の第 2 巻として刊行された。

2000 年（平成 12 年）

時間を生きる ベルクソンの時間をめぐって 石垣 優著 東京：文芸社  
2000. 4. 224p. 20cm.

ベルクソンの哲学 - 生成する実在の肯定 檜垣立哉著 東京：勁草書房  
2000. 4. x, 281, 4p. 肖像 20cm.

ベルクソン講義録 II 合田正人、谷口博史訳 東京：法政大学出版局  
2000. 5. vii, 519, 3p. 22cm.

差異について ジル・ドゥルーズ著 平井啓之訳・解題 新装版 東京：青土社

2000. 6. 214p. 20cm.

\*本書は1992年9月刊行の増補新版の新装版であり、宇野邦一の「新装版への付記」が新たに付け加えられた。

思考と運動 ベルクソン著 宇波 彰訳 東京：第三文明社 2000. 9. 2冊  
18cm. (レグルス文庫 223, 224)

\*上：pp. 1-173, vii. 下：pp. 175-359.

ベルクソン講義録 Ⅲ 合田正人, 江川隆男訳 東京：法政大学出版局 2000. 9.  
vi, 348, 2p. 22cm.

#### 2001年(平成13年)

ベルクソンの記憶力理論 -『物質と記憶』における精神と物質の存在証明-  
石井敏夫著 理想社 2001. 4. 210p. 22cm.

時間と自由 ベルクソン著 中村文郎訳 東京：岩波書店 2001. 5. 311p.  
15cm. (岩波文庫 青 645-9)

ベルクソン講義録 Ⅳ 合田正人, 高橋聡一郎訳 東京：法政大学出版局  
2001. 10. xxiv, 334, 3p. 22cm.

フランス・スピリチュアリズムの宗教哲学 岩田文昭著 東京：創文社  
2001. 12. viii, 250, 42p. 22cm.

\*1999年12月、京都大学へ提出した同名の博士論文に若干加筆したもの。(「あとがき」より)

#### 2002年(平成14年)

フランス哲学と現実感覚 -ボン・サンスの系譜をたどる- 紺田千登史著  
西宮：関西学院大学出版会 2002. 2. 342p. 22cm.  
(関西学院大学研究叢書 第99編)

意識に直接与えられたものについての試論 -時間と自由  
アンリ・ベルクソン著 合田正人, 平井靖史訳 東京：筑摩書房 2002. 6.  
310p. 15cm. (ちくま学芸文庫 へ-5-1)

ベルクソン 哲学的直観ほか ベルクソン著 坂田徳男ほか訳  
東京：中央公論新社 2002. 7. 25, 243p. 19cm. (中公クラシックス W22)  
目次 1p. (頁付けなし)

時間と生命の問い (檜垣立哉) pp. 1-25.

形而上学入門 坂田徳男訳 pp. [1]-73.

哲学的直観 -一九一一年四月十日ボローニヤ哲学会における講演  
三輪 正訳 pp. [75]-109.

意識と生命 -一九一一年五月二十九日バーミンガム大学におけるハクスリ記念  
講演 池辺義教訳 pp. [111]-157.

心と身体 -一九一二年四月二十八日「信仰と生活の会」における講演

飯田照明訳 pp. [159]-202.

脳と思考 ―ひとつの哲学的錯覚 池長 澄訳 pp. [203]-232.

原注・凡例 p. [204]

\*本書は、『世界の名著 53 ベルクソン』（中央公論社 1969 年刊）のうちの五篇の論文を一冊にしたもので、新たに檜垣立哉の解説「時間と生命の問い」を加えて刊行したものである。

ベルクソンとカントの社会論 ―人心覚醒から世界平和へ― 筒井文隆著

東京：近代文芸社 2002. 9. 308p. 22cm.

2003 年（平成 15 年）

ベルクソン 人間は過去の奴隷なのだろうか 金森 修著 東京：NHK 出版

2003. 9. 110p. 19cm. (シリーズ・哲学のエッセンス)

ベルクソン 道徳と宗教の二つの源泉 ベルクソン著 森口美都男訳

東京：中央公論新社 2003. 11. 2 冊（中公クラシックス W32, W33）

[ベルクソン 道徳と宗教の二つの源泉 I 26, 223p.]

目次 4p. (頁付けなし)

私たちをかたちづくる力 (杉山直樹) pp. 1-26.

[ベルクソン 道徳と宗教の二つの源泉 II 291p.]

\*本書は、『世界の名著 53 ベルクソン』（中央公論社 1969 年刊）のうちの『道徳と宗教の二つの源泉』を二分冊にしたもので、新たに杉山直樹の解説「私たちをかたちづくる力」を加えて刊行したものである。ただし、原本に掲載されていた図は全て削除されている。

ベルクソンと自我 ―自我論を通して生命と宇宙、道徳と宗教を問う― 伊藤淑子著

京都：晃洋書房 2003. 11. ix, 201p. 22cm.

2005 年（平成 17 年）

ベルクソンとバシュラール マリー・カリウ著 永野拓也訳

東京：法政大学出版局 2005. 4. 148, 12p. 20cm. (叢書ユニバーシタス 818)

心に映る無限 ―空のイメージ化― 長谷正當著 京都：法蔵館 2005. 9.

vi, 320p. 22cm.

フランス哲学 ―そのボン・サンスの伝統と日本、アメリカ 紺田千登史著

西宮：関西学院大学出版会 2005. 10. 325p. 22cm.

2006 年（平成 18 年）

未知なるものへの生成 ベルクソン生命哲学 守永直幹著 東京：春秋社

2006. 1. xi, 403, vip. 22cm.

ベルクソン読本 久米博, 中田光雄, 安孫子信編 東京：法政大学出版局

2006. 4. ix, 317, 8p. 22cm.

はじめに pp. iii-iv.

目次	pp. v-ix.
第Ⅰ部 ベルクソンと現代	pp. [1]-36.
いま、ベルクソンを読む - 記憶・文学・忘却 (久米 博)	pp. 2-11.
ベルクソンと現代 - 現前, 脱却, 痕跡, 控除, 反攻, 生起 (中田光雄)	pp. 12-27.
「ベルクソンと現代」小考 (安孫子 信)	pp. 28-36.
第Ⅱ部 ベルクソン哲学の諸問題	pp. [37]-112.
記憶と知覚の二元論 (石井敏夫)	pp. 38-47.
ベルクソンの存在論 (清水 誠)	pp. 48-57.
自由と社会 - 個性と生命の問題 (山形頼洋)	pp. 58-70.
ベルクソンにおける人間と宗教 (岩田文昭)	pp. 71-80.
「知性の発生」と科学論 - 『創造的進化』読解のために (杉山直樹)	pp. 81-91.
ベルクソンと美学問題 (上村 博)	pp. 92-102.
ベルクソンにおける言語問題 - 習慣の言語と創造の言語 (久米 博)	pp. 103-112.
第Ⅲ部 ベルクソンと哲学史	pp. [113]-172.
ベルクソンとプロティノス (内藤純郎)	pp. 114-123.
ベルクソンと十六世紀キリスト教神秘主義 - 十字架の聖ヨハネを中心に (中村弓子)	pp. 124-137.
ベルクソンと十七世紀の哲学 - デカルト, スピノザ, ライブニッツ (安孫子 信)	pp. 138-150.
ベルクソンと十八世紀哲学 - ルソーとカントを巡って (戸島貴代志)	pp. 151-160.
ベルクソンと十九世紀哲学 (加國尚志)	pp. 161-172.
第Ⅳ部 ベルクソンと現代思想	pp. [173]-276.
ベルクソンとサルトル (箱石匡行)	pp. 174-182.
メルロ＝ポンティのベルクソン読解 - 「流産した現象学」から「存在直観の学へ」 (松葉祥一)	pp. 183-193.
ベルクソンとフッサール (中 敬夫)	pp. 194-204.
実在と存在＝無 - ベルクソンとハイデガー (中田光雄)	pp. 205-216.
ベルクソンとレヴィナス (合田正人)	pp. 217-226.
ベルクソンとデリダ (越門勝彦)	pp. 227-241.
ベルクソンとドゥルーズ (檜垣立哉)	pp. 242-252.
ベルクソン生命論と現代科学 (守永直幹)	pp. 253-263.
ベルクソンと小林秀雄 - 信じることと苦悩すること (根田隆平)	

pp. 264-276.

ベルクソン著作解題・研究紹介 (ベルクソン哲学研究会) pp. 277-317.

I ベルクソンの著作 pp. 277-279.

II 主要著作の解題 pp. 279-305.

III 研究紹介 pp. 305-311.

世界におけるベルクソン研究の現在 (藤田尚志) pp. 312-317.

人名索引 pp. 1-3.

事項索引 pp. 4-8.

ベルクソン -〈あいだ〉の哲学の視点から 篠原資明著 東京：岩波書店  
2006. 10. xii, 195, 2p. 19cm. (岩波新書 1040)

ベルクソン 聴診する経験論 杉山直樹著 東京：創文社 2006. 10.

vii, 337, 36p. 22cm.

シネマ 2 時間イメージ ジル・ドゥルーズ著 宇野邦一, 石原陽一郎, 江澤健一郎,  
大原理志, 岡村民夫訳 東京：法政大学出版局 2006. 11. x, 403, 88p. 20cm.  
(叢書ユニベルシタス 856)

2007 年 (平成 19 年)

物質と記憶 アンリ・ベルクソン著 合田正人, 松本力訳 東京：筑摩書房  
430p. 15cm. (ちくま学芸文庫 へ-5-2)

創造と想起 - 可能的ベルクソニスム - 戸島貴代志著 東京：理想社 2007. 3.  
288p. 22cm.

ベルクソン化の極北 石井敏夫論文集 石井敏夫著 東京：理想社 2007. 11.  
321, 12p. 肖像 22cm.

2008 年 (平成 20 年)

ベルクソンとの対話 ジャック・シュヴァリエ著 仲沢紀雄訳 東京：みすず書房  
2008. 9. 356p. 肖像 20cm.

\*1969 年刊の新装版

\*訳者による「復刊あとがき」4p. が新たに加わる.

シネマ 1 : 運動のイメージ ジル・ドゥルーズ著 財津 理, 齋藤 範訳  
東京：法政大学出版局 2008. 1. viii, 389, 70p. 20cm.  
(叢書・ユニベルシタス 855)

2009 年 (平成 21 年)

時間と自由 ベルクソン著 平井啓之訳 東京：白水社 2009. 1. 267, iiip.  
18cm. (U books 1100)

\*本書は、1990 年に《イデー選書》の一冊として同社より刊行されたものである.

ベルクソン哲学における空間・延長・物質 本田裕志著 京都：晃洋書房  
2009. 2. xii, 316p. 22cm.

心身合一 ベルクソン哲学からキリスト教へ 中村弓子著 東京：東信堂  
2009. 3. x, 364p. 20cm.

2010年（平成22年）

不気味な笑い——フロイトとベルクソン ジャン＝リュック・ジリボン著  
原章二訳 東京：平凡社 2010. 4. 119p. 19cm.

\* 原題 *Le rire étrange : Bergson avec Freud, par Jean-Luc Giribone.*

創造的進化 アンリ・ベルクソン著 合田正人, 松井久訳 東京：筑摩書房  
2010. 9. 518p. 15cm. (ちくま学芸文庫 ヘ-5-3)

新訳 ベルクソン全集 1 アンリ・ベルクソン著 竹内信夫訳 東京：白水社  
2010. 11. 229, xviip. 20cm.

1：意識に直接与えられたものについての試論

\* わが国最初の個人訳全集。ただし、1965-66年に刊行された『ベルクソン全集』に含まれていたもので、今回翻訳対象となっていないものがある。全7巻別巻1の予定。原書の刊行順に従って、年1冊ずつ刊行する予定。

2011年（平成23年）

新訳 ベルクソン全集 2 アンリ・ベルクソン著 竹内信夫訳 東京：白水社  
2011. 7. 335, xlvip. 20cm.

2：物質と記憶——身体と精神の関係についての試論

\* 竹内信夫個人訳による新訳全集の第二冊目である。

「社会」の誕生 トクヴィル, デュルケーム, ベルクソンの社会思想史 菊谷和宏著  
東京：講談社 2011. 8. 212p. 19cm. (講談社選書メチエ 506)

新訳 ベルクソン全集 3 アンリ・ベルクソン著 竹内信夫訳 東京：白水社  
2011. 12. 230p. 20cm.

3：笑い 喜劇的なものが指し示すものについての試論

\* 竹内信夫個人訳による新訳全集の第三冊目である。

2012年（平成24年）

ベルクソン書簡集 1 アンリ・ベルクソン著 合田正人監修, ボアグリオ治子訳  
東京：法政大学出版局 2012. 7. xxvi, 506p. 肖像 20cm.  
(叢書・ウニベルシタス 978)

2013年（平成25年）

新訳 ベルクソン全集 4 アンリ・ベルクソン著 竹内信夫訳 東京：白水社  
2013. 2. 427, lxxvip. 20cm.

4：創造的進化

\* 竹内信夫個人訳による新訳全集の第四冊目である。

ベルクソン哲学の遺言 前田英樹著 東京：岩波書店 2013. 8. viii, 245p.  
20cm. (岩波現代全書 010)

\*本書の第Ⅴ章までは、雑誌『思想』に「ベルクソン哲学の喜び」として連載された。

## 附録2 ベルクソンの著作の翻訳および研究書等の刊行一覧 1913～2013

### I ベルクソンの主要著作等の翻訳

#### 1 全集

ベルグソン全集 東京：白水社 1965.5～1966.2. 20cm.

- 1：時間と自由－意識に直接与えられているものについての試論－（平井啓之訳）／アリストテレスの場所論（村治能就，広川洋一共訳）
- 2：物質と記憶（田島節夫訳）
- 3：笑い－おかしさの意味についての試論（鈴木力衛，仲沢紀雄共訳）／持続と同時性－アインシュタインの理論について（花田圭介，加藤精司共訳）
- 4：創造的進化（松浪信三郎，高橋允昭共訳）
- 5：精神のエネルギー（渡辺 秀訳）
- 6：道徳と宗教の二源泉（中村雄二郎訳）
- 7：思想と動くもの（矢内原伊作訳）
- 8：小論集 I（花田圭介編 花田圭介，加藤精司共訳）  
\*Ecrits et paroles. Paris：PUF，1967-1959. から編訳したもの。
- 9：小論集 II（松浪信三郎編 掛下栄一郎，富永 厚，秋枝茂夫共訳）  
\*Ecrits et paroles. Paris：PUF，1967-1959. から編訳したもの。

新訳 ベルクソン全集 1 アンリ・ベルクソン著 竹内信夫訳 東京：白水社  
2010.11～ 20cm.（7巻，別巻1）

- 1：意識に直接与えられたものについての試論
- 2：物質と記憶——身体と精神の関係についての試論
- 3：笑い——喜劇的なものが指示するものについての試論
- 4：創造的進化

\*以下，原著刊行順に年一冊宛刊行の予定

世界の名著 53 ベルクソン 責任編集 澤瀉久敬 東京：中央公論社 昭44.3.  
554p. 肖像，図，地図 19cm.

#### 2 主要著作

Essai sur les donnees immediates de la conscience. 1889.

時間と自由意志 ベルクソン著 北 吟吉訳述 新潮社 大14.2. 2,244p.  
20cm.（社会哲学新学説大系 3）

意識に直接与へられたもの アンリ・ベルグソン原著 広瀬哲士訳  
東京：春秋社 昭5.10. 174p. 肖像 20cm.（世界大思想全集 第36巻）

\*本書には『憂愁の哲理』（キルケゴール）『意識に直接与へられたもの』（ベ

ルグソン)『社会に就ての新見解』(オーエン)の三著作が収められているが、全体の目次はなく、また、それぞれの著作は独立した頁付けとなっている。

時間と自由 ベルグソン著 坂田徳男訳 東京:日本評論社 昭11.6.

3, 2, 204p. 23cm.

時間と自由 ベルグソン著 服部 紀訳 東京:岩波書店 1937.7. 254p.  
16cm. (岩波文庫)

時間と自由 ベルグソン著 竹内芳郎訳 東京:河出書房 昭30.3. 225p.  
肖像 15cm. (河出文庫 2005B)

時間と自由 -意識に直接与えられているものについての試論- ベルグソン著  
平井啓之訳 1965.5. (ベルグソン全集 1 pp.13-218)

時間と自由 -意識に直接あたえられたもの- ベルクソン著 中村雄二郎訳  
東京:河出書房新社 1966.1. pp.19-137. pp.400-402.  
(世界の思想 23 現代フランス思想 415p. 肖像 20cm.).

時間と自由 ベルクソン著 平井啓之訳 東京:白水社 1990.12.  
237, iiip. 20cm. (イデー選書)

時間と自由 ベルクソン著 中村文郎訳 東京:岩波書店 2001.5. 311p.  
15cm. (岩波文庫 青645-9)

意識に直接与えられたものについての試論 -時間と自由

アンリ・ベルクソン著 合田正人, 平井靖史訳 東京:筑摩書房 2002.6.  
310p. 15cm. (ちくま学芸文庫 へ-5-1)

時間と自由 ベルクソン著 平井啓之訳 東京:白水社 2009.1.  
267, iiip. 18cm. (U books 1100)

\*本書は、1990年に『イデー選書』の一冊として同社より刊行されたものである。

意識に直接与えられたものについての試論 アンリ・ベルクソン著 竹内信夫訳  
東京:白水社 2010.11 229, xviip. 20cm.  
(新訳 ベルクソン全集 1)

Matière et mémoire. 1896..

物質と記憶 ベルグソン著 高橋里美訳 東京:星文館 大3.2.  
7, 18, 5, 4, 475p. 23cm.

物質と記憶 ベルグソン著 高橋里美訳 東京:岩波書店 昭11.12.  
322p. 16cm. (岩波文庫)

\*大正3年2月、東京の星文館から刊行されたものの改訳版である。

物質と記憶 ベルグソン著 田島節夫訳 1965.8. (ベルグソン全集 2)

物質と記憶 -精神と身体の関係について- アンリ・ベルクソン著

- 岡部聰夫訳 東京：駿河台出版社 1995. 7. v, 363, [4]p. 19cm.
- 物質と記憶 アンリ・ベルグソン著 田島節夫訳 東京：白水社 1999. 10. 301, xiip. 20cm.
- \*本書は1965年に『ベルグソン全集』の第2巻として刊行された。
- 物質と記憶 アンリ・ベルクソン著 合田正人, 松本力訳 東京：筑摩書房 2007. 430p. 15cm. (ちくま学芸文庫 へ-5-2)
- 物質と記憶 アンリ・ベルクソン著 竹内信夫訳 東京：白水社 2011. 7 335, xlvip. 20cm. (新訳 ベルクソン全集 2)
- Le rire. Essai sur la signification du comique. 1900.
- 笑の研究 ベルクソン著 広瀬哲士訳 東京：慶応義塾出版局 大3. 4. 4, 1, 258p. 19cm.
- 笑いの哲学 アンリ・ベルグソン著 広瀬哲士訳 東京：東京堂書店 大13. 9. 9, 247p. 19cm.
- \*新訳版が昭和18. 6. に東京堂から刊行されている。
- 笑 ベルクソン著 林 達夫訳 東京：岩波書店 1938. 2. 211p. 16cm. (岩波文庫 1612-1613)
- \*1976. 11. に改訳版を刊行。
- \*1991. 1. に改訳版を「ワイド版岩波文庫 13」として刊行。
- 笑いーおかしさの意味についての試論 ベルクソン著 鈴木力衛, 仲沢紀雄共訳 1965. 10. (ベルグソン全集 3 pp. 11-152)
- 笑い 喜劇的なものが指し示すものについての試論 アンリ・ベルクソン著 竹内信夫訳 2011. 12 230p. 20cm. (新訳 ベルクソン全集 3)
- L'évolution créatrice. 1907.
- 創造的進化 アンリ・ベルグソン原著 金子馬治, 桂井当之助訳 東京：早稲田大学出版部 大2. 10. 3, 3, 647p. 肖像 23cm. (現代哲学 第1編)
- 創造的進化 上 ベルクソン著 小面孝作訳 東京：三笠書房 昭14. 6. 217p. 肖像 20cm. (現代思想全書 12)
- 創造的進化 下 ベルクソン著 小面孝作訳 東京：三笠書房 昭14. 8. 2, 2, 270p. 20cm. (現代思想全書 12)
- 創造的進化 ベルクソン著 松浦孝作訳 東京：三笠書房 昭18. 2. 3, 400p. 22cm.
- \*「あとがき」に、「三年まへに「現代思想全書」の一冊として上下二巻に分かれて公刊されたものに、新しく筆を加えて一卷にまとめたもの」とあり、これは昭和14年8月に三笠書房から刊行されたものを指していると思われる。

\*「現代思想全書」収録のものは翻訳者名が「小面孝作」となっている。上記の「あとがき」にはこのことについての言及はない。

創造的進化 ベルグソン著 吉岡修一郎訳 東京：第一書房 昭19.1.  
465p. 19cm.

創造的進化 上 ベルグソン著 吉岡修一郎訳 金沢：東邦物産株式会社  
文化部 発売：東邦書林 昭21.11. 274p. 20cm.

創造的進化 続編 ベルグソン著 吉岡修一郎訳 金沢：東邦物産株式会社  
文化部 発売：東邦書林 昭和22.3. 272p. 18cm.

創造的進化 ベルグソン著 真方敬道訳 上 東京：岩波書店 昭29.6.  
231p. 15cm. (岩波文庫)

創造的進化 松浦孝作訳 昭29.9 (世界大思想全集 哲学・文芸思想篇 16  
ベルグソン pp.1-271)

\*『世界大思想全集 哲学・文芸思想篇 16 ベルグソン』 松浦孝作, 榊  
田啓三郎訳 東京：河出書房 昭29.9.

創造的進化 ベルグソン著 真方敬道訳 下 東京：岩波書店 昭36.7.  
256p. 15cm. (岩波文庫)

\*上, 下を合わせて1979.7.に一冊本として刊行. 458p.

創造的進化 松浪信三郎, 高橋允昭共訳 1966.3.  
(ベルグソン全集 4 pp.5-416)

創造的進化 アンリ・ベルクソン著 竹内信夫訳 2013.2.  
(新訳 ベルクソン全集 4)

L'énergie spirituelle. 1919.

[全体]

精神力 ベルグソン著 小林太市郎訳 東京：第一書房 昭7.10. 255p.

精神力 ベルグソン著 小林太市郎訳 大阪：全国書房 昭21.6. 255p.

精神のエネルギー 渡辺 秀訳 1965.6. (ベルグソン全集 5)

精神のエネルギー ベルクソン著 宇波 彰訳 東京：第三文明社 1992.4.  
260p. 18cm. (レグルス文庫 199)

精神のエネルギー アンリ・ベルクソン著 原 章二訳 東京：平凡社  
2012.2. 332p. 16cm. (平凡社ライブラリー 755)

\*本訳書は, 平凡社ライブラリー・オリジナルである.

[各篇]

Le rêve. [夢]

夢の研究 ベルグソン著 篠崎初太郎訳 大阪：異端社 大14.3. 70p.  
15cm.

\*スロツソンによる英訳本 (Dreams. Tr. with Introd. by Edwin Emery Slosson.

New York : B. W. Huebsch, 1914.) の第二版の訳。

Durée et simultanéité. 1922.

持続と同時性 —アインシュタインの理論について 花田圭介, 加藤精司共訳  
1965. 10. (ベルグソン全集 3 pp. 155-382)

Les deux sources de la morale et de la religion. 1932.

道徳・宗教の二源泉 ベルクソン著 平山高次訳 東京：芝書店 昭和 11. 6.  
iii, 399p. 肖像 23cm.

道徳と宗教 ベルクソン著 吉岡修一郎訳 東京：第一書房 昭和 14. 9.  
419p. 20cm.

\* 奥付に「初刷一千五百部」「満州・朝鮮・台湾・樺太等の外地定価一円九十八銭」の記載がある。

道徳と宗教の二源泉 ベルクソン著 平山高次訳 東京：岩波書店 昭和 16. 1.  
408p. 16cm. (岩波文庫)

\* 訳者の序に「本訳書は、もと訳者が昭和十一年芝書店から出版せるものを、全文に亘って、訂正加筆したものである」と。

\* 1953. 1. に正字・新かなづかい版を刊行. 401p.

\* 1977. 3. に改訳刊行. 390p.

道徳と宗教の二源泉 中村雄二郎訳 1965. 7. (ベルグソン全集 6)

道徳と宗教の二つの源泉 森口美都男訳 昭和 44. 3.

(世界の名著 53 ベルクソン pp. 215-539)

道徳と宗教の二源泉 H. ベルクソン著 中村雄二郎訳 東京：白水社  
1978. 10. 388p. 20cm.

\* ベルクソン全集 6 (1965. 7. 刊) の新装版。

ベルクソン 道徳と宗教の二つの源泉 ベルクソン著 森口美都男訳  
東京：中央公論新社 2003. 11. 2冊 (中公クラシックス W32, W33)

\* 世界の名著 53 ベルクソン pp. 215-539 に収録されたものの新装版。

La pensée et le mouvant. 1934.

[全体]

ベルグソンの哲学 アンリイ・ベルグソン著 錦田義富訳 東京：警醒社書店  
大 2. 4. 6, 14, 3, 208, 8p. 肖像 19cm.

哲学入門 ベルクソン著 西宮藤朝訳 東京：平凡社 大 15. 3.  
8, 302p. 肖像 23cm. (仏蘭西哲学叢書 第1編)

\* 第一編は英訳本からの重訳, 第二編と第三編は論文集『精神の力』L'énergie spirituelle から訳者が選んで翻訳したもの。

ベルグソンの哲学 アンリ・ベルグソン著 錦田義富訳 改訂版  
京都：永沢金港堂 昭和 7. 8. 13, 4, 175p. 19cm.

\*附録 (ギュヨールの道徳論) pp. 129-175.

\*本書は大正2年4月刊行の改訂版(大正10年刊行か?)を元にしたものと思われるが、言及はない。

- 形而上学序説 アンリ・ベルグソン著 坂田徳男訳 東京:みすず書房  
昭22.1. 117p. 20cm.
- 形而上学序説 アンリ・ベルグソン著 坂田徳男訳 東京:みすず書房  
昭29.4. 138p. 19cm.
- 形而上学入門 坂田徳男訳 昭44.3. (世界の名著 53 ベルクソン  
pp. 61-108)
- 形而上学入門 坂田徳男訳 2002.7. (中公クラシックス W22  
ベルクソン 哲学的直観ほか pp. [1]-73)
- 夢と哲学 ベルクソン著 廣瀬哲士訳 東京:東京堂 昭11.4. 6, 249p.  
肖像 19cm.
- 思想と動くもの ベルクソン著 吉岡修一郎訳 東京:第一書房 昭13.3.  
356p. 20cm.
- 形而上学入門 梶田啓三郎訳 昭29.9. (世界大思想全集 哲学・文芸思想篇  
16 pp. 273-313)
- 哲学入門/変化の知覚 - 思想と動くものⅠ - ベルクソン著 河野与一訳  
東京:岩波書店-1952.2. 102p. 15cm. (岩波文庫)
- 哲学的直観 他4篇 - 思想と動くものⅡ - ベルクソン著 河野与一訳  
東京:岩波書店 1953.2. 138p. 15cm. (岩波文庫)
- 哲学の方法 - 思想と動くものⅢ - ベルクソン著 河野与一訳  
東京:岩波書店 1955.3. 112p. 15cm. (岩波文庫)
- \*1998.9.に、1952-1955にかけて三冊で刊行されたものを、原書本来の形に  
再編して一冊本とし『思想と動くもの』の標題で刊行.
- 思想と動くもの ベルクソン著 河野与一訳 東京:岩波書店 1998.9.  
435p. 15cm. (岩波文庫 青645-4)
- \*1952-1955に3冊で刊行されたものを、原書本来の形に再編して1冊本と  
して刊行した. (『解説』より.)
- 思考と運動 ベルクソン著 宇波 彰訳 東京:第三文明社 2000.9.  
2冊 18cm. (レグルス文庫 223, 224)
- ベルクソン 哲学的直観ほか ベルクソン著 坂田徳男ほか訳  
東京:中央公論新社 2002.7. 25, 243p. 19cm. (中公クラシックス W22)
- 3 講義録  
ベルクソン講義録Ⅰ 合田正人, 谷口博史訳 東京:法政大学出版局  
1999.4. xxxii, 461, 3p. 22cm.

- ベルクソン講義録 II 合田正人, 谷口博史訳 東京: 法政大学出版局  
2000. 5. vii, 519, 3p. 22cm.
- ベルクソン講義録 III 合田正人, 江川隆男訳 東京: 法政大学出版局  
2000. 9. vi, 348, 2p. 22cm.
- ベルクソン講義録 IV 合田正人, 高橋聡一郎訳 東京: 法政大学出版局  
2001. 10. xxiv, 334, 3p. 22cm.

## 4 書簡集

- ベルクソン書簡集 1 アンリ・ベルクソン著 合田正人監修,  
ボアグリオ治子訳 東京: 法政大学出版局 2012. 7. xxvi, 506p.  
肖像 20cm. (叢書・ユニベルシタス 978)

## 5 その他

- アリストテレスの場所論 ベルグソン著 五十嵐達六郎訳 東京: 伊藤書店  
1944. 3. 1, 2, 144p. 図 22cm. (翻訳学術論叢 2)  
\*本書はラテン語原文の完訳である.
- アリストテレスの場所論 村治能就, 広川洋一共訳 『ベルグソン全集 1』  
1965. 5. pp. 219-295.
- 記憶と生 アンリ・ベルクソン著 ジル・ドゥルーズ編 前田英樹訳  
東京: 未知谷 1999. 8. 283p. 20cm.

## II ベルクソン研究書の翻訳

- ベルクソン J.-L. ヴィエイヤール＝パロン著 上村 博訳 東京: 白水社  
1993. 5. 150, iip. 19cm. (文庫クセジュ 742)
- ベルクソンとバシュラル マリー・カリウ著 永野拓也訳  
東京: 法政大学出版局 2005. 4. 148, 12p. 20cm.  
(叢書ユニベルシタス 818)

- オイケンとベルグソンの哲学 ハーマン著 山崎寿春, 下野哲四郎訳  
東京: 春畝堂 大 3. 6. [10]6, 288p. 20cm.

\*凡例によれば, Eucken and Bergson their significance for Christian thought の  
翻訳の翻訳であるが, 「後編の「基督教神学と近代哲学的思想」は少しく  
基督教の気分が含まれて居るので省くこととした。」とあるので, 抄訳と  
見なせる.

- アンリ・ベルクソン V. ジャンケレヴィッチ著 阿部一智, 桑田禮彰訳  
東京: 新評論 1988. 6. 408p. 22cm.

\*原書 (1959 年, P. U. F. から刊行) に収録されている「附論」(論文 2 篇)  
と簡単な「ベルクソン研究書誌」は訳出されていない.

- 最初と最後のページ ウラジーミル・ジャンケレヴィッチ著 合田正人訳  
東京: みすず書房 1996. 6. vii, 499, xxip. 22cm.

アンリ・ベルクソン V. ジャンケレヴィッチ著 阿部一智, 桑田禮彰訳 増補  
新版 東京: 新評論 1997. 1. 482p. 23cm.

付論 - 最近のベルクソン研究動向 (永野拓也) pp. 470-478.

\*「第二版への訳者あとがき」によれば, 増補新版とした理由は次の二点である.

1) 1988年翻訳刊行時点で除外された二論文を新たに訳出して「増補新版」とした.

2) 新たに永野拓也の「付論 - 最近のベルクソン研究動向」を加えた.

ベルクソンとの対話 ジャック・シュヴァリエ著 仲沢紀雄訳

東京: みすず書房 1969. 4. 352p. 肖像 20cm.

ベルクソンとの対話 ジャック・シュヴァリエ著 仲沢紀雄訳

東京: みすず書房 2008. 9. 356p. 肖像 20cm.

\*1969年刊の新装版

\*訳者による「復刊あとがき」4p. が新たに加わる.

不気味な笑い——フロイトとベルクソン ジャン＝リュック・ジリボン著

原 章二訳 東京: 平凡社 2010. 4. 119p. 19cm.

\*原題 *Le rire étrange: Bergson avec Freud, par Jean-Luc Giribone.*

アンリ・ベルクソンとともに アントワーン・ダルマス・セルティランジュ著

三嶋唯義訳・解説 京都: 行路社 1976. 9. 73p. 肖像 23cm.

ベルクソンの哲学 アルバール・チボオデ著 高橋廣江訳

東京: 三田文学出版部 昭 18. 12. 424p. 22cm.

\*p. 424に「上巻終り」と印刷されている. 背, 標題紙, 奥付にはこの記載無し. また, 訳者の序跋はない.

ベルクソンの哲学 ジル・ドゥルーズ著 宇波 彰訳 法政大学出版局

1974. 6. 136p. 20cm. (叢書ユニベルシタス 54)

差異について ジル・ドゥルーズ著 平井啓之訳・解説 東京: 青土社

1989. 7. 169p. 20cm.

差異について ジル・ドゥルーズ著 平井啓之訳・解説 増補新版 東京:

青土社 1992. 9. 205p. 20cm.

\*1989年7月に青土社から刊行されたものに「ベルクソン 一八五九〜一九四一」および「訳者解説」を付加したものである.

差異について ジル・ドゥルーズ著 平井啓之訳・解説 新装版

東京: 青土社 2000. 6. 214p. 20cm.

\*本書は1992年9月刊行の増補新版の新装版であり, 宇野邦一の「新装版への付記」が新たに付け加えられた.

シネマ 2 時間イメージ ジル・ドゥルーズ著 宇野邦一, 石原陽一郎,

江澤健一郎, 大原理志, 岡村民夫訳 東京: 法政大学出版局 2006. 11.  
x, 403, 88p. 20cm. (叢書ユニベルシタス 856)

シネマ 1: 運動のイメージ ジル・ドゥルーズ著 財津 理, 齋藤 範訳  
東京: 法政大学出版局 2008. 1. viii, 389, 70p. 20cm.  
(叢書・ユニベルシタス 855)

心身合一 マールブランシュとピランとベルクソンにおける  
M. メルロ＝ポンティ著 滝浦静雄, 中村文郎, 砂原陽一訳  
東京: 朝日出版 1981. 11. 179p. 20cm.

### III 邦人によるベルクソン研究書

ベルグソン哲学の真髄 稲毛詛風, 市川虚山著 東京: 大同館書店 大 3. 4.  
2, 7, 2, 466p. 20cm.

ベルグソンの哲学 三浦哲郎述 東京: 赤城正蔵 大 3. 4. 100p. 16cm.  
(アカギ叢書 第7編)

ベルグソンと現代思潮 野村隈畔著 東京: 大同館 大 3. 5.  
13, 4, 315, 63p. 肖像, 図 23cm.

ベルグソン 中澤重雄著 東京: 実業之日本社 大 3. 10. 6, 2, 356p.  
肖像 20cm. (近代文豪評伝)

\* 中澤重雄 = 中澤臨川

ベルグソン 伊達源一郎編 東京: 民友社 大 4. 8. 4, 4, 24, 379p.  
肖像 19cm. (現代叢書 第10冊)

ベルグソン哲学と現代教育 島 為男著 東京: 大同館 大 15. 7.  
5, 8, 281p. 20cm.

ベルグソン 創造の哲学 坂田徳男著 東京: 河出書房 昭 12. 6.  
5, 270p. 肖像 20cm.

ベルグソンと科学的精神 吉岡修一郎著 東京: 野田書店 昭 11. 1.  
6, 4, 317p. 23cm.

\* 昭 15. 8. に第一書房から再刊.

ベルグソン哲学 安部光槌著 東京: 建設社 昭 16. 7. 350p.  
肖像 20cm.

ベルグソン哲学 安部光槌著 中 東京: 建設社 昭 17. 5. 404p. 19cm.

ベルグソン哲学 安部光槌著 下 東京: 建設社 昭 18. 8. 476p.  
肖像 19cm.

仏蘭西哲学研究 澤瀉久敬著 東京: 創元社 昭 22. 12. 2, 364p. 22cm.

フランス哲学研究 澤瀉久敬著 東京: 勁草書房 1950. 9. 318p. 22cm.

\* 本書は, 昭和 22 年 12 月に創元社から刊行された図書の再版である. ただし,  
本書は単なる再版ではなく, 収録論文の順序が異なると同時に, 「デカルトの

著作」「哲学と個性」の二篇が追加されている。

- ベルクソン 今井仙一著 東京：弘文堂 昭23.12. 174p. 19cm.  
 ベルクソン哲学入門 今井仙一著 大阪：創元社 1953.4. 139p.  
 図版 15cm. (創元文庫 D76)  
 科学入門 - ベルクソンの立場に立って - 澤瀉久敬著 東京：角川書店  
 昭30.10. 164p. 18cm. (角川新書 64)  
 ベルクソン 淡野安太郎著 東京：勁草書房 1958.5. iv, ii, 241, 17p.  
 肖像 18cm. (思想学説全書 1)  
 \*1974.3. 同社から改装版 [単行本] 刊行.  
 \*1996.1. 同社から新装版 [単行本] 刊行.  
 ベルクソンと現代 中島盛夫著 東京：塙書房 1968.6. 209p. 18cm.  
 (塙新書 18)  
 ベルクソン哲学 実存と価値 中田光雄著 東京：東京大学出版会 1977.3.  
 xxvi, 554, 10p. 22cm.  
 ベルクソン研究 坂田徳男, 澤瀉久敬編 東京：勁草書房 1961.1.  
 378p. 肖像 22cm.  
 ベルクソンの哲学 池辺義教著 東京：第三文明社 1976.1. 180p.  
 18cm. (レグルス文庫 53)  
 ベルクソン 市川浩著 東京：講談社 昭58.5. 11, 337, 9p. 肖像 18cm.  
 (人類の知的遺産 第59巻)  
 ベルクソン 市川浩著 東京：講談社 1991.5. 429p. 肖像 15cm.  
 (講談社学術文庫 971)  
 ベルクソンと自我 - 自我論を通して生命と宇宙, 道德と宗教を問う -  
 伊藤淑子著 京都：晃洋書房 2003.11. ix, 201p. 22cm.  
 フランス・スピリチュアリズムの宗教哲学 岩田文昭著 東京：創文社  
 2001.12. viii, 250, 42p. 22cm.  
 フランスの哲学2 生命を探る 澤瀉久敬編 東京：東京大学出版会  
 1975.10. v, 229p. 21cm.  
 ベルクソンの科学論 澤瀉久敬著 東京：中央公論社 昭54.2. 183p.  
 15cm. (中公文庫 M88)  
 アンリ・ベルクソン 澤瀉久敬著 中央公論社 昭62.6. (1987.6.)  
 223p. 15cm. (中公文庫 M88-2)  
 ポラニーとベルクソン - 世紀末の社会哲学 - 佐藤光著 京都：  
 ミネルヴァ書房 1994.5. x, 285, 13p. 22cm. (人文・社会科学叢書 1)  
 漂流思考 篠原資明著 東京：弘文堂 昭62.3. 245p. 20cm.  
 \*1998.6. 講談社学術文庫に収録. (講談社学術文庫 1333)

- ベルクソンの靈魂論 清水 誠著 創文社 1999. 2. x, 300, 7p. 22cm.
- ベルクソン 聴診する経験論 杉山直樹著 東京：創文社 2006. 10. vii, 337, 36p. 22cm.
- ベルクソンとカントの社会論 - 人心覚醒から世界平和へ - 筒井文隆著 東京：近代文芸社 2002. 9. 308p. 22cm.
- 創造と想起 - 可能的ベルクソニスム - 戸島貴代志著 東京：理想社 2007. 3. 288p. 22cm.
- モーツァルト・ベルグソン・枝雀 - 笑いの哲学と美学 - 松田明著 東京：近代文藝社 1995. 5. 183p. 20cm.
- 小林秀雄とベルクソン 森脇義明著 東京：JCA 出版 昭 57. 5. 200p. 22cm.
- 習慣と懷疑 モンテーニュ, パスカル, ベルクソン 三宅中子著 東京：南窓社 1985. 3. 180p. 22cm.
- 小林秀雄とベルクソン 山崎行太郎著 東京：彩流社 1991. 1. 220p. 20cm.
- \*1997. 11. 同社から増補版が刊行されている.
- 受肉の詩学 - ベルクソン／クローデル／ジード 中村弓子著 東京：みすず書房 1995. 12. v, 328, xxxviii p. 20cm.
- フランス哲学研究 矢次正利著 高槻：大阪医科大学哲学教室 1999. 3. 748p. 22cm. (非売品)
- \*著者が1966年から1996年までに発表した論文を収録. ベルクソンに直接関連した論文が六篇収録されている.
- 時間を生きる ベルクソンの時間をめぐって 石垣 優著 東京：文芸社 2000. 4. 224p. 20cm.
- ベルクソンの哲学 - 生成する実在の肯定 檜垣立哉著 東京：勁草書房 2000. 4. x, 281, 4p. 肖像 20cm.
- ベルクソンの記憶力理論-『物質と記憶』における精神と物質の存在証明- 石井敏夫著 理想社 2001. 4. 210p. 22cm.
- フランス哲学と現実感覚 - ボン・サンスの系譜をたどる - 紺田千登史著 西宮：関西学院大学出版会 2002. 2. 342p. 22cm. (関西学院大学研究叢書第99編)
- ベルクソン 人間は過去の奴隷なのだろうか 金森 修著 東京：NHK 出版 2003. 9. 110p. 19cm. (シリーズ・哲学のエッセンス)
- 心に映る無限 - 空のイメージ化 - 長谷正當著 京都：法蔵館 2005. 9. vi, 320p. 22cm.
- フランス哲学 - そのボン・サンスの伝統と日本, アメリカ 紺田千登史著

- 西宮：関西学院大学出版会 2005. 10. 325p. 22cm.  
 未知なるものへの生成 ベルクソン生命哲学 守永直幹著 東京：春秋社  
 2006. 1. xi, 403, vip. 22cm.  
 ベルクソン読本 久米 博, 中田光雄, 安孫子信編 東京：法政大学出版局  
 2006. 4. ix, 317, 8p. 22cm.  
 ベルクソン -〈あいだ〉の哲学の視点から 篠原資明著 東京：岩波書店  
 2006. 10. xii, 195, 2p. 19cm. (岩波新書 1040)  
 ベルクソン化の極北 石井敏夫論文集 石井敏夫著 東京：理想社 2007. 11.  
 321, 12p. 肖像 22cm.  
 心身合一 ベルクソン哲学からキリスト教へ 中村弓子著 東京：東信堂  
 2009. 3. x, 364p. 20cm.  
 ベルクソンにおける知性的認識と実在性 永野拓也著 東京：北樹出版  
 2011. 2. 234, xip. 22cm.  
 「社会」の誕生 トクヴィル, デュルケーム, ベルクソンの社会思想史  
 菊谷和宏著 東京：講談社 2011. 8. 212p. 19cm. (講談社選書メチエ  
 506)  
 ベルクソン哲学における空間・延長・物質 本田裕志著 京都：晃洋書房  
 2009. 2. xii, 316p. 22cm.  
 ベルクソン哲学と科学との対話 三宅岳史著 京都：京都大学学術出版会  
 2012. 7. 22cm. (プリミエ・コレクション 15)  
 ベルクソン哲学の遺言 前田英樹著 東京：岩波書店 2013. 8. viii, 245p.  
 20cm. (岩波現代全書 010)

\*本書の第V章までは、雑誌『思想』に「ベルクソン哲学の喜び」として連載された。

#### IV その他(雑誌の特集など)

- 特輯「ベルグソン」 『思想』 227, 1941. 4. pp. 1-132.  
 ベルグソン特輯 『哲学雑誌』 652, 昭 16. 6. pp. 1-70.  
 ベルグソン研究 『理想』 396, 1966. 5. pp. 1-110.  
 〈特集〉 ベルクソン 『現代思想』 22 (11), 1994. 9. pp. 7-493.  
 〈特集〉 ベルクソン -イマージュ 『現代思想』 22 (11), 1994. 9.  
 pp. 94-133.  
 〈特集〉 ベルクソン -カントとベルクソン 『現代思想』 22 (11), 1994.  
 pp. 223-249.  
 〈特集〉 ベルクソン -記憶 『現代思想』 22 (11), 1994. 9. pp. 171-232.  
 〈特集〉 ベルクソン -生命論 『現代思想』 22 (11), 1994. 9.  
 pp. 387-430.

- 〈特集〉 ベルクソン - 潜在性 『現代思想』 22 (11), 1994. 9. pp. 8-93.
- 〈特集〉 ベルクソン - 光と美 『現代思想』 22 (11), 1994. 9.  
pp. 352-386.
- 〈特集〉 ベルクソン - ポリティクス 『現代思想』 22 (11), 1994. 9.  
pp. 274-351.
- 〈特集〉 ベルクソン - メディア 『現代思想』 22 (11), 1994. 9.  
pp. 134-170.
- ベルクソン生誕 150 年 『ふらんす』 84 (10), 2009. 10. pp. 42-49.
- ベルクソン生誕 150 年 『思想』 1028, 2009. 12. pp. 3-278.

## 日仏哲学会

- ・ 2007 年春季シンポジウム：19 世紀フランス・エピステモロジーとベルクソン  
『フランス哲学・思想研究』 12, 2007. pp. 38-71.